

# 太 棹

昭和十六年三月廿八日  
第三種郵便物認可

昭和十八年一月廿三日 印刷  
昭和十八年一月廿五日 發行

(每月一回)  
廿五日發行

太棹 (第四百一十一號)



松本  
書

第四百一十一號

高橋東好氏優勝祝賀義太夫會



昨秋第卅七回重部五十義會に於て  
 入、四五昇點一等入賞の榮譽を獲  
 得した高橋東好氏の優勝祝賀義太  
 夫會が舊臘九日淺草並木俱樂部に  
 て賑々しく開催されました。氏は  
 豊竹和歌吉師につき鍊磨精進、そ  
 の「戀十」は定評ある立派なもの  
 でありました。  
 寫眞 前例右より豊竹和歌吉、高  
 橋東好、濱田新昇、原田越巴、淺  
 田奇聲。後列右より星野桔梗、的  
 野蘭路、和田春和の諸氏

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八  
 電銀二〇八

御禮

東京臨時第一陸軍病院 百四十一號

東京臨時第三陸軍病院 同 三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

古弊社の趣旨に賛同せられ御寄贈を賜り此  
 段奉謝候

太棹社

新名譽會員

葛和都玉氏

福永都樂氏

行田以呂波氏

右の諸氏本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有御禮申上候

太棹社



〇〇より 邦治

幾山河越ゆにる夜空に父在りき  
冬枯や黄土開けし支那の旅  
不寝番仰ぎし空に月と父

### 邦治の出征 (私の誇り)

私の家では昔から兵隊になつたといふ人のある事を聞きませぬ、私共兄弟にも一人もありませぬ。祖先は随分戰場を駆けた武士ではありましたが、不慮な位柔弱の子供が代々續いたものであります。邦治は生後百五十日程で貰つて育てたのであります。此の邦治が昨夏、〇部隊に入營をして舊臘〇〇方面へ出征致しました、これが私の誇りであります。(此頁は五十義會の記念寫眞を掲載すべき處、間に會はず、餘白を借りて自家廣告をさせていたゞきました。)寫眞上は舊臘三日間の休暇に歸つた邦治。下は邦治三歳の時。(芳河士)



## 太棹 第四百一十一號 目次

表紙・カット……………齋藤清二郎

口繪 高橋東好氏祝賀會・邦治の出征

藝 格 湯 吞……………濱村米藏(二)

演舞場の文樂出開帳(一)……………齋藤拳三(四)

義太夫の倫理觀……………伊藤紅二(一〇)

文 樂 圖 譜(一)……………宮尾しげを(二三)

新春「池ノ上」の一夜……………徳永靜翠(二四)

果して人形遣のみの責任か……………中山泰昌(二六)

東部五十義會番附……………(二二)

「イサ」知らず問題……………岡田蝶花形(三三)

藝 評 二 題……………内田三千三(三四)

「みのりの秋」に就て……………鶴澤蟻鳳(二八)

太棹社彙報……………(三〇)

會 報・消 息……………(三六)

靜淨會(山田壽瓢) 伊豆山より(徳永靜翠)  
三好會(森三好)



## 藝 格 湯 呑

濱 村 米 藏

十二月號の『演藝畫報』を見ると、鶴澤友次郎氏の藝談「文楽鑑賞」の中に、三代目越路太夫の言葉として、「十種香」の段を「大塚(攝津のこと)師匠の結構な語り口が耳に残つてゐる間は語れん」と云つて、たうとう語らなかつたさうである。追にその人らしい自愛と見識が窺はれて面白い。語り「十種香」一段は四段目物の精神を能く體得して、ギンウケといふ華麗な調子の遣ひ方になつてゐる。さらばとて聲があるから聲一杯に語る譯に行かず、力を撓めて氣品を持たせどこまでも優美に表現しなければならぬものである。さういふ次第で自信のある越路は、竟にあれだけの「十種香」を終生手掛けなかつたのであらう。

どつちかと云へば、越路は聲の悪い方だつた。それを全く鍛錬のお蔭一つで、あれだけ優れた太夫になつたのである。それで憶ひ出されるのは、越路が湯呑の湯を決して飲まな

つたことだ。無論湯呑はチャンと側に型の如く置かれてある。けれどどんなに長い段物を語つても、それへ手を觸れようとはしなかつた。

高座へ上つた藝人が、湯を飲むことに、何等の不思議はない。常盤津や清元の太夫は自分の番になる前方、咽喉へしめりをくれるためでもあらう、大抵湯呑へ手を掛ける。落語家が都々逸などを唄ふ場合は、湯ぶくれ都々逸と稱して、わざとかぶ／＼飲む真似さへして見せる程である。その位であるから湯は一種の補助手段なのである。普通素人では、聲が枯れて來た時に、一杯の湯がどんなに新しい調子を出してくれるか、實際助かるのである。が、嚴密な意味になると、途中で湯を飲むことがいいか悪いか、随分問題になる筈である。古名優の逸話に、双傷の場面で幾人かを斬つたあと、一寸蔭が入るところがあつて、その時舞臺裏で息つきに湯を飲んで

から、又出て斬つたけれど、それを或る武藝の達人が見てゐてあれでは斬れてゐないぞ、かう注意したと傳へられてゐる。本黨の藝になれば、そこまで來ることが考へられる。尤も義太夫の場合、太夫が湯を飲むには、飲んでもいいやうな段取が用意されてゐて、息をつくことになつてゐるから、俳優の呼吸とは自ら違ふので、斷るまでもなく一概には云へない。

西洋流の聲樂になれば、歌つてゐる途中で、湯を飲んだら餘程變なものになるだらう。それは聲樂の組織や精神が、まるで別なものであるからだ、義太夫を始め日本の諸淨瑠璃が、湯呑の湯で本質的に何ものかを、藝の内容へ付け加へてゐるかどうか、その邊は少々疑問たらざるを得ない。どうも積極的な意義は怪しいと思ふ。それに雄辨術では、湯呑の湯が適當な唾液に依つて、生理的に調節されてゐる咽喉のうまさや無茶苦茶にして了ふものであるから、なるべく飲まない方がいいと云ふことを何かで讀んだことがある。これも大いに道理があるやうである。いづれにしろ、飲まないで濟まされるものなら、飲まない方が、良いことは分かり切つてゐる。従つて聲量のある、聲の美しい太夫なら、湯呑を敬遠しても、さう感嘆しないでいい理窟だが、惡聲の越路だけに、もつと深い工夫研究があるのを想像するのである。

といふのは、越路にこんな逸話があることを、最近又聴きに聴いたのである。越路の側近の者が、多分番頭みたいな任

の者だつたけれど、ついこれは忘れて了つた。兎に角さういふ者が、ある蓄音器會社から頼まれて、三千圓の吹込料で越路を動かさうとしたのである。私に三百圓儲けさせると思つて、どうぞ吹込んで下さいと懇願した。ところが越路は思案の未だ、お前さんへは私の手から三百圓上げやうから、蓄音器の會社の方を謝絶(ことば)つて貰ひたいと云ふのである。さうしてその理由を説明するには、自分は聲が悪いので、なか／＼思ふやうな調子が出ない。それでどうやら語つてゆくうちに、だん／＼調子が良くなる。そんな工合なのに、蓄音器へ吹込むとなると、少し語つたかと思へば、直ぐ止めさせられる。それから又續けるといふ順序になるから、どうやら程度の調子も出さじまひになる。結局碌なものが吹込めない、氣の毒だが先方へ謝つてくれるやうと。越路在世當時の三千圓は、今日の三萬圓にも當るのだが、それにさへ目をくれないで、自分の藝を守つたのは偉いと思ふ。

それやこれや、いつも越路の見臺の側に置かれた、あのかさりの湯呑は、取りも直さず越路の藝格を、おほらかに表示するものだつた。思へば美しくも尊き湯呑かな。

# 演舞場の文樂出開帳 (一)

齋藤 拳 三

大東亜の戦線は益々擴大し、戦局の前途は尙遠慮である。國運を賭しての國家總力戦である。年二回、酷暑と歳末の最悪季節に上京する大阪の人形浄瑠璃文樂座は、全部が、各々多忙な寸暇を裂いて鑑賞して置かないと、好き者は後世に悔を残す程度の名品のみであらうか、此の頃めつきり増へた金ポタンの學生の爲にも、吾等は先輩として、其の玉石を別けておく必要があると思ふ。柄にない秃筆、饒舌を振ふ所以である。

## 第一回 (十二月二日)

少々遅参して大隅太夫が、もう逆櫓の「お筆が胸に焼金さす」の件だったので、若手の逸足清次郎のあの斯道でやかましいお筆の出の三弦を聴き損じたのは残念だった、大隅の逆櫓は樋口の名乗りまでの前半を端場らしい世話に語つてるのは流石である。「聞いてびつくり」や、「恥と知れ」は耳に残る旨さである。人形は門造の權四郎が結構である。若い者を呼んで「こい」の處で故文三、故多爲藏共に演じた出刃了を磨ぐ仕草を只奥から持つて出るだけに改めたのも隱かな演り方だと思ふ、其うして、お筆の「いかやうにお嘆きなされても」の言葉の間に酒を呑む事、「水くさいわい」で足拍子を

踏んで後る動き、「親父様」で樋口が權四郎を持上て上座に直す人形劇獨特の、單純、幼稚な善き仕草が相變らず一興である。

近頃河原の達引は四條河原が前にあつて相生太夫が非常な佳作であつた。特に傳兵衛を旨く語つた、若き新左衛門とも稱すべき、吉五郎の三弦も、こんな端場だと實に結構で、特に段切れは相生、吉五郎コンビ以來二年ぶりで初日が出た感じだつた。人形も官左衛門が柳の木につかまるのを後から傳兵衛が切り付けて、脊中に赤い糸が出るなど、非常に愉快である。

御大、古靱太夫の堀川は此の度は明るくて非常に結構である。婆は特に「お鶴さん待遠であらうな」の最初の言葉

がはつきり失明の老婆を感じさせて旨い。

お俊をウンと締めつけて語るのと「天明逃れず」のカカリを素の様に行くが、此度の堀川の以前と特に異なる點である。筆者は古靱太夫の語り場では「熊谷陣屋」と「すしや」が一番嫌ひで、「堀川」は大好きな演り物であつたが、不思議にも安藤君、三宅君の如き、古靱理解者が異口同音に此れを喜ばなかつたのに、此度の調子に難くない好條件の明るい演出によつて、兩君とも此れを認めてくれたのは甚だ嬉しい次第である。

人形は紋司のお鶴だけはやめてもらう様、大谷社長に御願ひしたい。いくら紙上で注告しても、さらに改心の兆候さへ見へないからである。榮三の與次郎は此の度は結構で「さぐる手先に」の件など非常な進歩である。「良い女房」で、チヨイと泣くなども丁寧親切な演出である。人形遣では、此の老人一人が毎年いくらかの進歩があるのは敬服でもあり亦同時に人形劇の前途をいよ／＼心細くする次第である。

次の十種香は、新加入觀西翁の爲に古靱、大隅、住、以下幹部總出のお付き合である。其内呂太夫の濡衣が最上の出来である。觀西翁は何よりも顔と姿が立派である。

七十九歳であるの三味線の弾ける人である。此の人の三弦としての善き素質は誰にでもすぐ裏附けられると思ふ。然も其の貴い天稟を惜し氣もなく投げ捨てて、相場、競馬、待合の

主人と、おそろしい人生の廻り道をして來た人だ。七十九年の永き夢さめで、再び元の戀の古巢に歸つた觀西翁の善き老爺の姿である。私は此れを心善くむかへた、古靱以下の幹部と、あやうく若太夫を襲名しやうとした梅本香伯に鶴澤觀西翁を襲はせた、今は病む鶴澤友次郎を賞めたいと思ふ。筆者は、豊澤松太郎、鶴澤勝鳳、梅本香伯の三人は前から嫌ひである。こう云へば、土地最負の江戸っ子は怒るであらう。然しまず其の前に、怒りを靜めて次の言葉を聞いて頂きたい。

東京における此の三長老は今の東都義太夫界に何を残したか、此れを三代團平、六代廣助の現在義太夫界に残した大なる足跡に比格して見るがよい。總じて關西の藝人は東京を甘く見て居た、東京へは皆碌きに來たのである。松太郎にしても勝鳳にしても東京へ金を貯めに來たと云つても決して過言でないと思ふ。香伯に至つてはむしろ遊びに來たと云つていい。七十九年の永き歳月の流れは、彼をやつぱり善き義太夫節の三味線弾きとして、人生最後の道を歩ませているのである。善心に立歸つた觀西翁の三弦は、梅本香伯の廊下の藝評よりどれ程いゝか解らないと思ふ。

筆者は高齢な觀西翁の建康を祈りながら、心地よく歸途についたのである。十種類の人形は愚劣である。紋十郎が「赤らむ顔」の件で文五郎の一番悪い所を眞似てるのは心細い。特

にひどいのは、御殿から奥庭への道具變り、櫓下が懸命に「情用捨も荒木の大将」と語つても、政龜の謙信と榮三郎の濡衣は、とうに引込んで、舞臺は空あきである。纏説する迄もない、歌舞伎座では謙信が濡衣を三段に中啓で抑へて、極る美しい畫面の見得になる重要な件である。筆者の見物した二日目は、大谷社長も見て居たはずである。實に怪しげな三位一體である。

大切の壺坂は、後半の伊達太夫が喜左衛門の相三味線になつてから進境が見えて喜ばしい。前半を語る住太夫は玄人仲間、常に好評な人であるが、筆者は感心しない。稽古に語つて居る感して、悪い所もないが善い所もなく、更に迫力がな。障子越に聴く壺坂である。此れに榮三と文五郎が澤市お里で出る、暖房装置のない寒い劇場である、早く宿へ歸つて寝かしてやりたい氣がした。

## 第二回

(十二月七日)

伊達娘戀縛鹿子は、例の文五郎の火見櫓だけだと感違をして、わざと後れて入場すると、前にめずらしい八百屋が若手のカチ合で出てゐるのだつた。南部太夫のお七、雛太夫の吉三郎、つばめ太夫の久兵衛、司太夫の彌作なら何をおいても聴くのだつたに、人形も政龜の久兵衛が隠當な演技だつた。

物を取變へての引込み、「孫右衛門に制せられ」以下の小春、治兵衛、孫右衛門、三人の畫面の形等、代表的な人形劇と云へる。

次の傾城阿波鳴戸は、古靱太夫此度の東上の御見やげでもあり、亦非常な傑作であつた。

一體、筆者は此の淨瑠璃が嫌ひであつた、駒太夫、土佐太夫、故源太夫皆感心しなかつた。

第一、お弓が馬鹿々しい、あんなにすぐに追かけて行く位なら、なぜ初めから親子と名乗らないのだらう。自分が、あまで母を戀しがる娘を、すげなく歸してしまつて、すぐ追かけて行くなど、手数をかけたものであると思つて居た。所が此の度の古靱太夫の演出を聞くと、お弓は初めから身の置所も無い様に痛々しく語つて行く、お鶴との説端詰つた會話は、あんなに口では心強く云うものの、果して親子の名乗りもせず、無慈悲に追ひ歸す事が出来るだらうか。十中八九はとも出来そうもない様に語るのである。筆者は古靱太夫の語るお弓なら必ず追かけて行くに違ひないと思つて居た。攝津大掾を知らず、名人大隅を聞かぬ寡聞な筆者は、始めて阿波十の眞の姿に出合つたのである。

此れが在來の阿波鳴戸の風格と異なるものなら、尙結構である。二代古靱の風として永久に若き人に示したいと思ふ。成程、淨瑠璃は語り方一つで、其の曲の運命、死活を左右

次の酒屋は、前半が住太夫、後半が伊達太夫、實に拙い役の振り方である。住太夫は玄人仲間では非常によくおぼへてる人と云はれて居るが、評者は其れを信じない。一例が此の酒屋なども「七生までの勘當」を、半兵衛が泣くなど腹違ひである。半兵衛の前半は細説する迄もない、婆が「追従云ぬ偏箱なちのちの人」と云譯する程、トゲトゲしくありたいと思ふ。門造の宗岸は結構だが「聲の半七は人殺し」で泣くのは、此れも演り過である。

心中小春治兵衛の河庄の前半を、呂太夫とは此れも無理な役場である。然し意外の收穫は其の相三味線の仙糸で、久し振りに世話物弾きの本領を心行くばかり發揮して滋味津々たる名演技であつた。仙糸は先年素義の審査を依頼された所、崩れた藝を聴くと自分の藝が崩れると云つて逃げ歸つた由、此の潔癖あつて始めて此の名演出が何時までも出来るのであらう。

後半の大隅太夫は、善六、太兵衛を旨く語つて相當な佳作であるが、音使いと足取には相變らず難がある。

人形は玉造の孫右衛門が、善六太兵衛の治兵衛を折檻する間の出が例によつて早過る外、榮三の治兵衛の如き美事な演技で、此の治兵衛は面目なげにうつ向いて居る間が非常に旨い。河庄の人形は總じて面白い演り方で「歌舞伎役者の眞似をして」で扇を使う技巧、段切れに、治兵衛と孫右衛門が着

する事を痛感すると同時に、義太夫節の深遠、難釋、複雑、怪奇に降参してしまつた次第である。

親愛なる、岡田文學博士よ、淨瑠璃は字句を勉強するより以上に、演出を勉強し答へ、妄言多罪。

然るに不思議にも玄人やお歴々には、古靱太夫五つの語り物中、此れが一番不評である。筆者はつらく玄人評の頼みにならない事も痛感した。

武智金二氏一派の古靱禮拜派は、いたすらに平時に大聲を發するより、こう云ふ時こそ決然立つて健筆を振るう可だと思ふ。「母さん名は」の「名は」を省略する用意、「國次の刀の詮議」あたりの獨特の節の運び、「見れば見る程幼顔」の情味、「心を静めよそ／＼しく」の力無げなお弓の描寫、「私を泣かす」の呼吸詰る具合、誠に結構である。奥は三代大隅が、すばらしかつた。小判と聞ての笑の旨さ、「何じあ笈摺」とギョククリする具合、結構である。慾を云へば十郎兵衛が悪心を起す件も少し羨くありたい點である。

「よう寝入つて居るわ」の萬事は終つた捨バチの言葉も上々であつた。

清六も此度の東上ではこれが一番よく、特に段切れが素晴らしい。「西國するので御座ります」の後のテンなど美事だつた。床とは反對に、人形は實に悪く、文五郎のお弓は、お鶴の

「母さんはお弓」を聴く間は平気でスバ／＼煙草を吞んで仕末である。只娘の痛々しい言葉を聞いて、終始癪の起りそうな姿は非常にいい。門口でお鶴の髪を直す件も、流石に文五郎である。どうか紋十郎や龜松も其の良き部分だけを眞似て欲しいものである。

紋司のお鶴ときては悪い方の標本で、十郎兵衛におどされて「こんな所に居る事いや」の件はピーピーでもしそうで、張りたをしてやりたい様なコマちやくれた小娘である。

大切に、三十三間堂の柳が、若手のカケ合である。織太夫もまでこんな象徴的、或は夢幼的なものは人にないらしく、亦觀西翁の古風な糸とは甚だ調和しない。此場の人形は甚だ滑稽で、柳の精ともあらう者が懐手をしたり、バタ／＼足拍子をして動いたり、木やり音頭になると、平太郎は扇を聞いて祭典の年番行司其儘の姿である。早く何とか改良すべきだと思ふ。

### 第三回 (十二月十三日)

序幕、忠臣藏八段目は、強腕綱造のシンと、政龜の戸無瀬に期待して、早くから出かけたが、戸無瀬は龜松の代役で失望した。

九段目は、握み合同様な織、大隅、住、南部、相生の掛合に、糸が前半觀西翁、後半清次郎と云ふ、馬鹿げた出し物で

型の意味が呑み込めぬらしく、一幕完全な總討死である。

然し次の、古觀太夫久々の沼津は非常な潔作で、初めて生き歸つた心地がした。

津太夫の沼津が平作が柄に有る強味から、特に千本松原を賣り物としたのと反對に、是は亦、前半をサラリと端場並に語つて、「お米一人」からウント締め附て語り、秋の暗夜に一人寂しく夫の身を案する遊女上りの佳人を旨く演出した。

此の日は五日替りの内、一番聲を痛めて居たが、心にかゝる夫の病氣など美事だつた。此の人一流の院本尊重で、先代津太夫以来やつて来た門口の十兵衛のお米へ云ふ入れ言葉も抜き、千本松原の平作もバタ／＼苦しまず、十兵衛は只一言「親父様」と云ふだけなのは、一般的には向かぬ、其くせ古觀黨には無やみに好かれさうな濫い演り方であつた。

只一箇所は、お米内の場で、お米が「さもしい咄を」の言葉を平作が「ウン」と何だか解らない様な返事を一度しておいて「オ、ホンに其うちあアハハハ」と笑になる此の人獨特の面白い技巧を今度は演らなかつたのは惜しい氣がした。

榮三の十兵衛は相變らず結構だが「切先がなまらうぞや」で平作の手を刀にさはらせる悪型は、腹を切る事を暗示させて面白くない。

芝居のよく解る此の人である、何とか改良を望む。門造の平作はよく使つてゐたが、「千鳥足」の件で泣くのは無くも

素人の會なら割前の取りたい一心から、此んな勘平が卅六人と云ふ役割もあるが、淨瑠璃の聖地とも稱せらるる文樂に情けない役割である。特に三味線が觀西翁に清次郎と云ふ時代色から見ても全然、別の役場かと思はれる味の違ふ糸を二人ならべて、然も觀西翁が床から下ると、ぞろ／＼顔の順に座り直したりする醜體で、大隅の本藏は筆者の様な重負が聞いてさへ、辯護の仕様もない不出來で、「恨みもサラリと晴れ」と「娘が歎き」の二箇所が綺麗に外れて、笑の大きい位を寂しく賞翫する程度なのは、全く悲觀した。友人Aに、「今日の御重負は如何ですな」等と眞向からひやかされて、全く立つ瀬が無かつた。

織の戸無瀬も「シツソと静まり」などと、蝶花形文學博士に、捕まりそうな箇所があり、朝から少々風邪心地だつたのが、ぐつと重くなつた様な氣がした。

人形も、文五郎の戸無瀬は「大だわけ」で驚くあたり、流石旨いが、何時の間にか居なくなり「二日前に到着」あたりでノコ／＼出て來る仕末、亭主は手負なのに女房は時々奥でお膳拵へでもして居るらしく、玉造の本藏は久々に荒物使いらしく腕を見せて、門造の左に玉市の足と云ふ好條件の小割で、渾然たる演技なのに、初めに一度出ながら小便にでもいつたのか、引込んで亦ノコ／＼出てくる仕末、龜松のお石も「つり合ぬ」で火鉢の灰をいぢる何時もの型を到襲しながら

がなである。文五郎のお米は「昔の残る風俗」の時、舞臺に居ないのは例の悪い癖で困る。

新口村の前半を語る伊達太夫は進境が見えて心強い、「窓を打つ」をぼんやり語り、喜左衛門も此處をぼんやり弾いたが、流石に喜左衛門は、弱腕で聞いている面白くない三味線だが、よく調べて居る。

此處はこう演らないと「あゝ雪が降るそうなの言葉が出る。伊達と大隅は言語の明瞭なのが何よりの強味である。此後半の呂太夫は、反對に言語不明瞭なのが弱點である。此の日も正道枯淡の仙糸の三味線にスツカリさらわれてしまつた。

「申し受け」や「涙にそれと」あたりの平々凡々たる箇所を小味に弾く三味線は全く今の文樂の名物と云へる。若い學生諸君はどうか仙糸の三味線に注意せられたいと思ふ。

# 義太夫人の倫理觀

伊藤 紅 二一

太掉、義太夫の藝術は日本的な所産の中でも特に太根をもつた正道をゆくものとして健全娛樂の叫ばれる時に大ごゑを出して推薦出来るものであると自分は思つてゐる。

これは専ら、其の取扱はれる所の内容と、大衆に示唆する主題とが全くわが國民性その物に根を生やしてゐるからであつて、この點、この界限に住むほどのものは大手をふつて大威張りで歩いてもらつてさしつかへない。

そのことが、たとへ銃劔をとつて前線に討ちむかふ第一線の勇士でなくとも、よし又、産業戰士としてハンマアを振つて工場で眞黒になつてはゐなくとも、立派にそれに劣らぬ國家的な仕事をしてゐると自負してもよろしいし、又、その位の自負と誇りをもつて、義太夫の一らなり、太掉の一にぎりにその國家的な意欲を盛つてもらひ度いものである。

扱て、其處で義太夫にもらるべき國家的意欲のうちで最も基本的のものは何であるかと云ふに、それは、何と云つて

義太夫藝術をかりて傳へる所の仁義道德、忠孝一本の日本精神が、その語る人によつて變容されることがありとしたならば、之は遺憾千萬の話である。

よし形の上での變容はないにしても、其の語り手彈き手的人格の上に一點いかがほしいものがありとせんか、其處に生れた藝術は凡て如何なるものになり果てるであらうか想像にかたくない所である。

論語よみは論語を知らずしては通用しまいと思ふれ共、最近の如く機械科學の極度に發達してゐる場合に於ては例へばラジオの講座の様なことまで辛じてメッキがはげないでしおふせることもあるかも知れないが、藝術を通して直ちに人性にアツピールする云はば感情を移入し、人格と人格との直接的なタッチを必要とする藝術の世界に於ては、單にメッキでは絶対に通れないのである。

かりにも感情をゆりうごかすべき藝術的な分野の作用に於て、その感情自體が屏息せしめられてゐたのでは始めから問題にならぬ。ましてや、喜怒哀樂を端的に表現し、或る場合に於ては極端とまで思はれるほどに誇張して聽者を感動せしむべき義太夫藝術に於ては一にも感情、二にも感情である。

勿論、其處にそれ等感情をおしささへてゐるであらう所の意志の力や、知的なもの一應は豫想しないわけではないが、藝術の特に義太夫等に於ては、全然と云つてもよい位に感情

も仁義忠孝を根幹とし所謂日本道德のそれであつて、それ以外のものを介入させたのでは、つけ焼刃になり、又その技葉末節を取扱つたところで、ピツタリするわけがない。

このことはこれからの新作者にとつて云つておき度いところである。

又、今までの義太夫人も、その心がまへてゐてもらはぬと得てして時流におもねるていの語り口、彈き手となるおそれがあり、ひいては義太夫藝術その物にまでも、ひびの入ることになるのであるから、大いに憤んでもらひ度い所である。

更に、義太夫人に切望に堪えないことは藝術家としての自負を持つと共に、立派な指導者と云ふのも大袈裟ならば一角の世道人心誘掖の任にあつたと云ふ氣位をもつ者——であつてもらひ度いことである。どうも日本では古來「論語よみの論語知らず」が通り言葉になり、通り相場になつてゐる様でこまる。

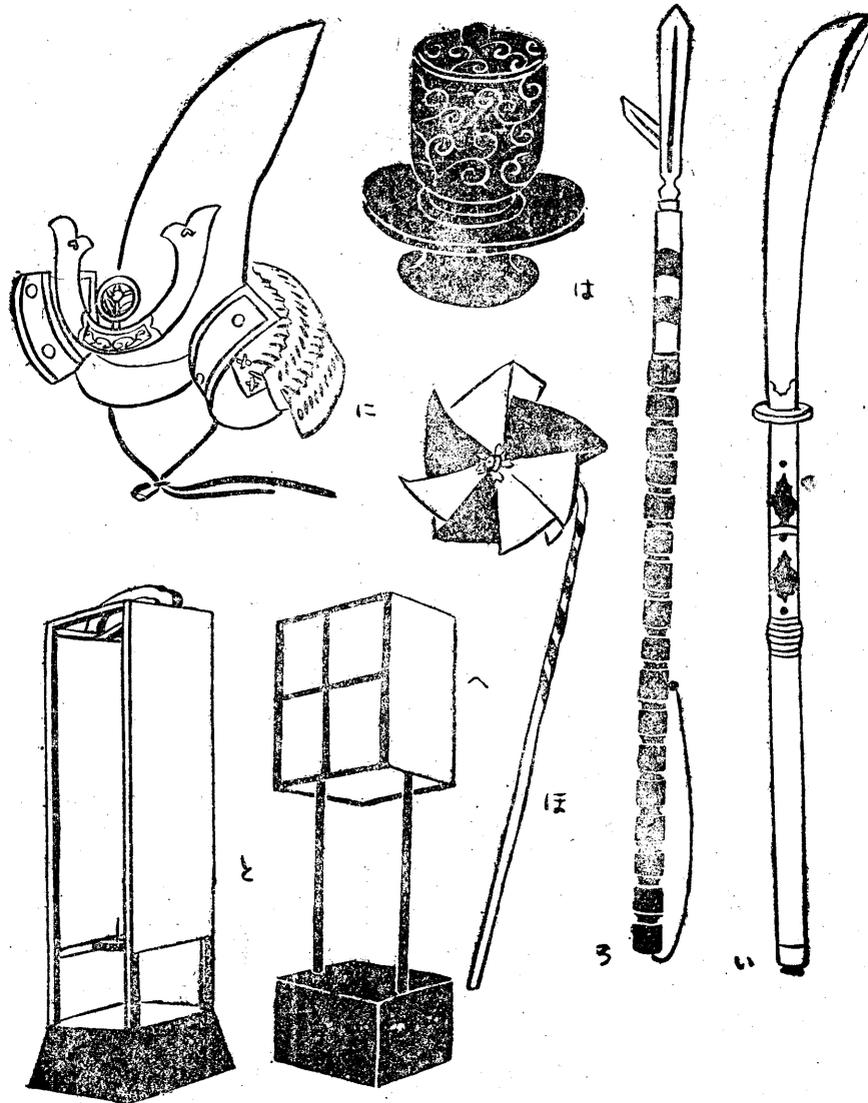
に依存してこそその存在理由があるのであつて、この點、些かでも、その感情にくもりがあつたり、乃至は腑におちかねる點があつたりしたのは藝術品として成立たないとさへ極論出来る様な氣がするのである。然し、之等は藝術の規範を決定すべき價值判斷の限界に存することになるので、ここまではこの點でも強調しようとは思はぬ。

唯、ここでは極く大まかに常識的に感情をあざむいては藝術はなりたぬ、隨つて義太夫藝術の場合に於ては「論語よみの論語知らず」では通らぬこと、之からの義太夫人は尠くも論語よみにして論語を知り、且つそれを身を以つて實踐する所の論語通の最たるものであることを不可缺の條件とするのみである。

つまり身をもつて仁義忠孝禮智信を體得してゐるものにして始めて眞の義太夫を語り得、而して人を感動せしめ得るものである、所謂、板についた藝術が生れ出るのであつて、たゞ形骸のみ傳へる義太夫は凡そ似而非なる鸚鵡か何かの様な口うつし的な語り手に墮す以外の何物でもないだらうと云ふことを強く云ひたいものである。

ここまで筆者は義太夫人の人格修養の部面を強調して來たが、たゞそれだけでは満足出来ないのである。義太夫が立派に藝術部面に大きな地歩をもつものであればある程、その藝道の修業に實に偉大なる精進のあとがみられなければなら

をげし尾宮 (一のそ) 譜 圖 樂 文



正 賀

會表發曲古夫太義

豐豐豐豐豐豐竹豐豐竹

澤澤澤澤澤澤澤本竹竹本

深川區清澄町三ノ六  
電話本所四〇八一番

芳猿美扇絃和松朝巴駒卯  
太喜之之 見 登 太  
郎知助助内孝郎夫夫夫

ないのである。殊に、古來、この道は他の如何なる分野のものよりも修業の困難且つ嚴肅なることに於て定評があり、名人上手ともなれば、唯單に藝術的の完成が即ち、人格の最後の仕上げにもなつて來てゐたものであることに思ひを致せばたとへば文樂に於ける紋下などの名號が、あだやおろそかに一朝一夕に與へらるべきものでない事を知ることが出来る。とにかく、この戰事體制下の藝能界に於て特殊の地歩を占めてゐる義太夫の部門のものは、常に人格の修養と藝道の修源とに格段の努力精進の必要なことを自覺してもらひ度いである。

團司を聴く 岡田道一

わが生誕五十回をば祝ふごと藏前ビルに集る百人  
われを祝ふ激勵、漫罵、熱交々うれしや最後は團司の  
紙治

三十年われの心をひきつけてなほ放たざる團司の聲は  
團司聴けば京極思ふその下宿中根といへる扇屋思ふ  
われ二十はじめて團司きくにける入道館の舞臺を思ふ  
鰻谷つながらぬ縁は是非もなや團司の聲は耳に烙きつく  
團司小住知りてかにかく三十年わが人生も半ば年經ぬ  
五十四われ年老いぬ昔より三つ下の團司に共に老ゆら  
人生は旅のごとしとエレベータ前に別れし小住、團秀  
しはらくは別れて居よと野崎村文句おどけてつぶやく  
われは

團司彈きしあくる朝特急大阪へ小住かへれり團秀連れ  
て

團秀を後援する會

純情の二十六歳團秀といふ女義のためあつまる人々  
恒例の祝儀はわれの妙心寺つゞきて子太郎愛水出づる  
三玉の壺坂のあたり入り來たる若き天才批評家内田  
東京のすべての三味に勝りたる音色と腕を激笑す吾笑

# 文樂圖譜解説

## 宮尾しげを

(い) 薙刀 鬼一法眼の切、五條橋に出て来る辨慶の持物、總長さ五尺、柄は三尺。

(ろ) 佐々木の槍 槍先九寸、柄三尺五寸六分の長さがあり、下分についてゐる紐が中途にかけてあるのを外すとバネ仕掛けで一尺二寸の柄が中から出て来る。斜に出てゐる齒は柄の座から二寸の處から出てをり、槍先は銀色。

(は) 湯呑 伊賀越の傳授の際、大内記の用ゆる黒塗湯呑。臺高さ二寸七分、茶碗の乗る處徑四寸七分、湯呑の高さは二寸五分。

(に) とつばい兜 挟間合戦の七つ目の義龍が被る。忠臣蔵の大序鶴ヶ岡の兜改めにも流用さる。とつばいは銀

色、高さ九寸五分、左右九寸、つば三寸五分、紐は紫、内側徑五寸。

(ほ) 風車 伊賀越の饅頭娘に出る。長さ一尺三寸の長柄に赤、緑、黄、紫白色の紙の順で風車は出来てゐる。左右五寸。

(へ) 遠州行燈 この種の形のものを書ひ、時代ものに使ふ。高さ一尺一寸程度である。

(と) 角行燈 多く世話物に用ゆ。丸行燈も世話である。寸法は時代と同じ座の一角は下部八寸五分、高さ四寸上七寸七分、この上の寸法は頂きまでのび、二寸七分だけ四本の棒に紙が張られてゐない。

## 綱昇披露會

豊竹昇改名綱昇披露會は二月廿二日午後一時より日本橋俱樂部に開催。

# 新春「池ノ上」の一夜

徳 永 静 昇

大東亞戦争第二年目の新春を迎へて益々御清祥の段奉賀候

扱て新春七日、猿之助、團司師匠より岸衛氏と小生の兩人御招待を請け候に就き、友人山田壽瓢氏を誘ひ、茲に三人同道にて、池の上の兩師匠の自宅に参上、晚餐の馳走になり、夜分は隣組の聴衆を集めて、各人一同くさり宛猿之助師匠の絃にて語り合ひ申候。而して終りに臨み、團司師匠が「質店」を語られ申候、相變らず結構なる淨瑠璃にて、恰も明治時代、女義界の旺盛なりし時代を思はせ、小生等も新春早々頗る堪能させて貰ひ候が、同時に隣組の連中も思はざる此景物に非常に喜んで歸宅致され候。

今日この「質店」の如きものを語る女義は、同師匠を除きては、適任なる女義は無かりさうに思はれ候、殊にその枕の語り口は、特に結構に感じ申候、因に、この「お染久松」の實説は、延寶七年九月二十九日、大阪東横堀瓦屋橋の傍に住み居りし油屋何某の娘お染を、丁稚の久松と云へる者に、子守させ置きたる處、誤つて近所の川へ落して、水死させたるを、主人怒つて、折檻の爲に、久松を土藏に押し込めたるを、子供心にも責任感に悶えて、その土藏の中にて、縊死したる事件を脚色したるものに御座候。併し當時お染は二歳、久松は十三歳にて候間、心中など致すべき年配には無之、全く作者の架空の構想に有之候

今或る参考書より引用して、御参考までに申上候へば、このお染久松の事件を脚色したる淨瑠璃は三種有之、その一つは寶永八年四月、大阪豊竹座に於て上演したる紀海音作の「お染久松袂の白しぼり」次に菅專助作の「染模様妹脊門松」が、明和四年十二月、北堀江の豊竹座に上演され、また近松半二作の「お染久松新版歌祭文」が安永九年、稻荷座に於て上演致され候

而して、前記菅專助作の「染模様妹脊門松」は、紀海音作より趣向を借りて作したるものにて、この曲は、小山屋の段、油屋の段を上巻とし、また道行の段、生玉の段、質店の段を下巻とし、上下二巻より成り、この質店は俗に皮足袋と申して、下巻に有之候

その大略の筋は、大阪瓦町の質屋油屋の一人娘お染が、丁稚の久松と、何日しか忍び合ひ、今は隠せぬ岩田帯の身となりしが、その大晦日の雑沓の中にて、店の前を聲高々と、お染久松の浮名を祭文節に作りたるを讀賣りして通る、一方久松は帳場格子に凭れて睡るうちに、お染と心中する夢を見て、心を慄はせて居ると、同じ夢を見たお染は、山家屋へ嫁入りすることは、譬へ死んでも厭だと語りて、久松を死に導く、更に一方久松の父久作は、久松の身を案じて、遙々主人の許を尋ね、買ひ來りし皮足袋を示して、我が子に強意見をする、お染の母親も共に世間の義理を説いて、嫁入りすることを頼む爲に、お染久松の兩人は遂に止むを得ず、義理に迫つて、表面だけは切れる事となり、久松は藏に押し込められたが、遂に二人は藏の中に於て、心中するといふ趣向に有之候

猷終りに、今回猿之助、團司兩師匠より御歡待を受けたることを感謝致し候。

(一月九日)

# 果して人形遣のみの責任か

中山泰昌

昨冬十二月、新橋演舞場の「文樂」の蓋があいて間もなく「東京新聞」に齋藤拳三氏の「淨瑠璃を毀す……人形遣の反省を促す」といふ一評論が掲げられた。僅かに三十行ばかりの短文ではあるが、その中には、軽々に看過することの出来ぬ幾多の問題を含んでゐるが故に、少しくこれを検討して見たいと思ふ。

第一は、評者の態度であり、第二は、此の一文の持つ内容に關しての幾多の問題である。が此の第二の方は、紋下並に座頭の責任問題にまで言及しなければならぬものがあり、尤もその或るものは、文樂の内部的の問題として、何時かは自然に解決さるゝものと信じ、疾くより論じて見たく思ひながらも、今日まで差控へて來たのであるが、此の頃の様に虚構の若しくは無知の事實を基とした暴露的放言が横行するのを見ては、私は、其の眞實の事を發表して大方に訴へ、以

て文樂改善の促進に資して見たいといふ念に驅られざるを得なくなつた。併し、それは與へられた字數では、到底書き切れないから、こゝでは他の二三の問題について断片的に少しく所感を述べて見ることにする。

齋藤氏の一文は、「淨瑠璃を毀す」其の責を「人形遣」に歸せしめた深刻なテーマである。それが一般鑑賞家としての言説でなく、「太夫と三絃は切符賣りはしながらも、相當勉強して居るらしいが、人形遣の方は座頭榮三に藝を訊く人もないらしい」といふ、凡そ文樂の廊下高以外、最近急激に増加した一般觀客には、何の事やら分らぬ樂屋内の事を知悉した「通」の人の言として、その與へる印象は頗る深刻なものがある故に、私はこれを一場の放言として見ることは出来ぬのである。

齋藤氏は、「淨瑠璃を毀す」その責任者として「人形遣」のみを叱責してゐられるが、同氏の意は、文樂では淨瑠璃だけが大切である、人形は、その邪魔をしてはいけないといふ、淨瑠璃本位の見方である乎、それとも現在の人形遣は、何れも放漫、低劣、無自覺で、之では、「文樂そのものを毀す」といふの意味なの乎。氏のテーマから見れば前者のやうであり、文中の三位一體崩壊論から見れば、後者のやうでもあるが、其の孰れにしても問題は頗る大きい。單に「堀川」の「お鶴」を一實例として叱責しただけでは、餘りに無責任な放言としか思はれぬ程の深刻な問題が伏在してゐるので、勢ひ氏の所謂「三位一體崩壊」の根據を衝いて、紋下並に座頭の責任に言及せざるを得ぬのであるが、それは他日に譲る事とする。

「神妙な稽古娘であるべき紋司のお鶴は、撥で頭をかくやうら大騒ぎである。見物も亦大笑ひである」と齋藤氏は云つてゐられるが、お鶴は撥で頭をかくてはゐない、あれは撥に髪の毛をつけてゐるのであつて、何も大騒ぎと誇張する程のものではなく、「見物も亦大笑ひ」とは、餘りにも仰々しい書き方で、其の場面を見ない者には、どんなフザケた眞似をやつてゐるか分らぬといふ殘刻な印象を與へるに十分である。人形が折々示す藝の細かさに、見物は思はず緊張した筋

肉をゆるめて、息を抜く、それが嗟嘆とも歎賞ともなるのであるが、それは決して其の場の情景を打毀するものではないのみか、それが一轉して後段の緊張を一層深刻にする効果があるのである。床にしても人形にしても、理屈一點張りの解釋で、果して狙ひ通しの効果があるかどうかとも研究して見る必要があると思ふ。

文樂の子役人形は、殊更に胴體が小さい、其の小さい人形があつた相當長い稽古の唄の間、御注文通りの神妙一點張りで、果して舞臺をダレさせずに行けるであらうか。文樂には、終始目を閉じて床を聴くだけに來る客もあるであらうが、然うでなく「義太夫節の文句すら知らぬ人」にも其の場面を預けねばならぬのであるから、あまり自分勝手な注文をつけて、却つて自分の語り効果を薄めるといふことも考慮する必要がある。

お鶴の此の位の動作が不可ならば、與次郎の動作は尙ほ叱責ものであらう。現に安部豊氏も「如何に榮三の藝でも、堀川の母と、お俊との大切なところで、與次郎が梅干をしやぶつて飯を喰ふ、あんな他の藝の邪魔をする邪道は眞似しないこと」と戒めて居られ、又ある看客からは、與次郎が寝てから後の野卑ぶりを非難した投書が樂屋に來たことがある。(それがお門達の文五郎の部屋に來た)こんな風に、堀川の場面

については、玄人からも素人からも色々な注文が能く出るが併し與次郎は一體、二枚目の人形か三枚目の人形かといふ事も考へて見ねばならぬ。初代玉造は、大隅の壺坂なるが故に澤市をさへ三枚目の人形で遣つたといふことであるが、それは兎も角、與次郎は沼津の平作とも違ふだから、敢て其の下司ぶりを咎める譯には行かない。

人形の誇張味を全部拂拭せよといふ妄論者はあるまい。寧ろ其の誇張味を誰もが人形の上として愛する。併し今一歩進んで、人形の誇張的動作が、其の人形遣ひの藝の餘裕といふことに發する場合もあるといふことをも觀てやらねばならぬ。お鶴の如き子役は、多くは若い人形遣ひが遣ふ。それだけ腕が若いと、あの唄の節に三味線のカンを合はせるだけが精一杯で、撥に油をつけたりする餘裕は、中々素人が考へる程ラクに出来るものではない。今の文樂で、ヤットコサと人形を動かすといふだけでなく、即ち人形に遣はれるでなく、自由にホントウに人形を遣ひ得るもの、云ひかへれば藝に餘裕のある者が、果して幾人居るであらうか。然ういふことを考へると、評者も今少し深切に、其の實際に通じての理解を以て、彼等を育ててやつて頂きたいと思ふ。

齋藤氏は又「特にひどいのは、十種香の道具變りで、檜下

て居り、若手は云ひたいことも何も云ひ得ないといふ實情を齋藤氏は御存じなきか。榮三が沼津の平作を持って餘して、あのイラ／＼した早目々々の懸聲がお耳に留らなかつたか。この事については別に申す事とする。」

「太夫と三味は切符賣りしながらも、相當勉強してゐるらしいが、人形遣の方は座頭榮三に藝を訊く人もないらしい」といふ、其の「らしい」とあるのは何ものかの放送に據つたものか(近來はそれが頗る多い)、それとも根據ある事實に基いての言か。それが人形叱責のテーマの下に書かれた一文中の言葉であるが故に、私は敢てお尋ねするのである。

中堅どこ以下の人形の不勉強さ、だらしなさ、無研究ぶりそれは私にも目に餘る。併し、それは果して人形だけの事であらうか。

太夫、三味は如何。自分持場の三十分や一時間がすむと、あとは悠と樂々と部屋に寝そべつたり、廊下でお客の御機嫌を伺つたり、でなければサツサと小屋を出て了ふ。昔は偉い太夫の語る舞臺裏には、若手が争つて集まつて来て、稽古本に朱を入れたものだそうだが、今日では古靱の床裏にだつて殆ど誰一人研究に来るものがない。

そこへ行くと、人形の方は興行中たゞの一幕でも身體を休めることは出来ぬ程の勞働ぶりである。シンカ、でなければ

古靱が「情用捨も荒氣の大將」と語つても、政龜の謙信、榮三郎の濡衣二人とも、サツサと引込で了つて、舞臺は空あきである」と、之を歌舞伎の場面と比較して難じて居られる。こゝで特に「檜下古靱」と斷はつてあるのは、他の凡々太夫とは違ふ檜下が語るのだから、従来の例を破つても歌舞伎通りにせよといふ意であるかも知れぬが、こゝは人形の舞臺としては、やはりあのやうに「サツサ」と引きあげねばならぬのである。それは歌舞伎の如く、幕や暗轉を用ゐることが出来ぬから、みきりを外して、チョンと柵を入れて道具を變へる爲には、人形は其のフリも動作も犠牲にして早く引込まねばならぬのである。人形の舞臺では、床一本の語りにつかねばならぬ爲に、人形が文句より一足先さきに動いて次の用意をするのは屢々ある。然ういふ時には、人形は非常にイヤな思ひをしながらも、フリや思ひ入れを殘して、床の語りを追つかけて行かねばならぬので、人形が太夫の犠牲になりながら、それを咎め立てされては堪るまい。併し二十四孝の此の場合の如き、別に工風があるならば、「檜下古靱」の責任として、その研究なり、打合はせなりを命ずべきであり、人形の方でも、ヘマな引込みでなく、一芝居して見得を切つて入られるから其の方が助かるのである。(大玉造時代いざ知らず、今日では人形連總體に意久地がなく、元老どこは昔の太夫と違つた今の太夫を呑んでかゝつて好い加減にあしらつ

左か足かで次々に働き通してゐる。が、其の間が即ち彼等の唯一の勉強道場であつて、人形には最初から、口を以て、或は手を取つて教へて貰ふといふことは絶対に不可能の難修行を此の舞臺の勞働中に於てのみ積み得るのである。教へられぬ藝、習はれぬ藝、それが人形遣ひに約束づけられた修行道である。

太夫や三味線は一人でも稽古が出来る。二人揃へば本格的勉強が出来る。そこへ行くと人形の方は三人揃はねば一つの人形をさへ動かす事が出来ず、三人揃つたとて太夫、三味なしに人形は動かされない。然ういふ實際の事情を、樂屋通の齋藤氏が御存じない事はあるまいが、斯ういふ事實を以て、人形のみ不勉強ぶりを暴露して、文樂破壊の責任を之にのみ負はさるゝのは如何であらう。あの妹背山の山の段で、上手下手の兩床掛合の、何の諧調もなき長屋の喧嘩のやうな騒々しさ、あれを齋藤氏はどう見られるであらう。お鶴が頭をかいだのでは梁上の塵も動かぬが、妹背山の合唱では、屋臺も小屋も飛びさうだ。人形ばかり大騒ぎすると、責められもすまない。又太夫の中には、自分一人よがり勿體ぶつて、人形を平氣で殺して行くのさへある。それを齋藤氏はどう見られるか。斯くても太夫尙可ならば、今日の文樂から宜しく人形を撤廢すべきである。昔、名庭弦阿彌は、太夫に稽古をつける時「オイ／＼そないな語り方したら人形は遣はれへんがな」と

叱つたと聞く。大夫が旨からうが拙からうが、息が長からうが短からうが、其の語りについて行かねばならぬ人形の運命それを深切に考へて行つたら、三位一體崩壊の責任を人形ばかりに問ふことは出来ぬのがあらう。

「大夫、三味は切符賣はしても」といふ一言も、テーマがテーマであるだけに、人形は切符賣に専念して勉強を怠つてゐるとも世間には取られよう。が人形の方では殆ど切符を賣る者はない。これは大夫、三味には稽古先の関係があるのでどんな若手でも連中を作ることが出来、松竹も其の出来高を成績にしたりするので、皆争つてやるのだが、人形には然うした縁故がないから切符を賣ることが出来ないのである。現在でも文五郎、紋十郎後援會が一番古くから存在し、門造玉徳、之につぐ位の事で、最近二三回龜松、紋司が連中を作つた以外に誰がやつてゐるか。文五郎、紋十郎の切符が圖ぬけて多く出来るので、弟子まで總動員してゐるやうに云ふ者があるが、之は後援會がやつてゐる以外、御當人は勿論、部屋

の弟子も一人として扱ふ者はない。人形遣の爲に一言宛を雪ぐのであるが、そんな事よりも、文樂の連中可否といふやうな、もつと大きい問題について研究して頂きたいと思ふ。

座頭榮三に藝を訊く者もない、といふ事は、單なる人形遣

ひの不勉強に原因するものかどうか。斯うい内部暴露の出来る樂屋通としての齋藤氏に、今一步實情の御研究を願ひたいのである。教へられぬ藝、習はれぬ藝の人形遣は何を訊きに行けばよいか。又人形遣に然うした暇があるかないか。更に又榮三の性格は、入り替り立ち變り押かけて来る、然うした紛雜に堪へられる人かどうか、——然ういふ事も考へて見る必要があらうが、文樂の樂屋では、この「座頭」といふ事について、皆が妙に遠慮を有つてゐる實情がある。然ういふ事も研究して頂いたらよいと思ふ。

私は斯く辨じたからとて、現在の人形遣があれでよいとは思はぬ。併しこの文樂が、折角デデン黨の「一つ穴」から漸く大衆向きに開放されて来た矢先へ、何も知らぬ其の大衆に向つて、文樂破壊の責任を人形遣にのみあるが如く宣言せらるることを遺憾とするものである。私は前號「批評と活字」で批評家に對する所感を述べたが、理解も同情もなき、若しくは實情無視の不深切な放言漫評の如何に危険多きかを重ねて思はざるを得ないのである。(完)

大關	六二	房	前頭	一	八	登	龍	八	二	巴
關脇	五七	笑	同	四二	〇	壽	光	七	二	松
小結	五〇	司	同	四一	〇	吾	樂	七	二	北
前頭	五〇	久	同	四〇	〇	伊	登	六	七	し
同	四九	光	同	三九	〇	松	樂	六	七	都
同	四八	久	同	三八	〇	二	波	六	七	美
同	四七	司	同	三七	〇	伊	登	六	七	都
同	四六	久	同	三六	〇	松	樂	六	七	都
同	四五	光	同	三五	〇	二	波	六	七	美
同	四四	久	同	三四	〇	伊	登	六	七	都
同	四三	司	同	三三	〇	松	樂	六	七	都
同	四二	久	同	三二	〇	二	波	六	七	美
同	四一	光	同	三一	〇	伊	登	六	七	都
同	四〇	久	同	三〇	〇	松	樂	六	七	都
同	三九	司	同	二九	〇	二	波	六	七	美
同	三八	久	同	二八	〇	伊	登	六	七	都
同	三七	光	同	二七	〇	松	樂	六	七	都
同	三六	久	同	二六	〇	二	波	六	七	美
同	三五	司	同	二五	〇	伊	登	六	七	都
同	三四	久	同	二四	〇	松	樂	六	七	都
同	三三	光	同	二三	〇	二	波	六	七	美
同	三二	久	同	二二	〇	伊	登	六	七	都
同	三一	司	同	二一	〇	松	樂	六	七	都
同	三〇	久	同	二〇	〇	二	波	六	七	美
同	二九	光	同	一九	〇	伊	登	六	七	都
同	二八	久	同	一八	〇	松	樂	六	七	都
同	二七	司	同	一七	〇	二	波	六	七	美
同	二六	久	同	一六	〇	伊	登	六	七	都
同	二五	光	同	一五	〇	松	樂	六	七	都
同	二四	久	同	一四	〇	二	波	六	七	美
同	二三	司	同	一三	〇	伊	登	六	七	都
同	二二	久	同	一二	〇	松	樂	六	七	都
同	二一	光	同	一一	〇	二	波	六	七	美
同	二〇	久	同	一〇	〇	伊	登	六	七	都
同	一九	司	同	〇九	〇	松	樂	六	七	都
同	一八	久	同	〇八	〇	二	波	六	七	美
同	一七	光	同	〇七	〇	伊	登	六	七	都
同	一六	久	同	〇六	〇	松	樂	六	七	都
同	一五	司	同	〇五	〇	二	波	六	七	美
同	一四	久	同	〇四	〇	伊	登	六	七	都
同	一三	光	同	〇三	〇	松	樂	六	七	都
同	一二	久	同	〇二	〇	二	波	六	七	美
同	一一	司	同	〇一	〇	伊	登	六	七	都
同	一〇	久	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇九	光	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇八	久	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇七	司	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇六	久	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇五	光	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇四	久	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇三	司	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇二	久	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇一	光	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇〇	久	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美

第三十 東都五十義會成績

査 審

吉田 三芳 長谷川文久  
野澤 吉彌 安藤 光樂  
高瀬 操 豊澤 團友

技藝 顧問 豊澤猿之助

會長 細川 高瀬 清  
副會長 高瀬 清

大關	六二	房	前頭	一	八	登	龍	八	二	巴
關脇	五七	笑	同	四二	〇	壽	光	七	二	松
小結	五〇	司	同	四一	〇	吾	樂	七	二	北
前頭	五〇	久	同	四〇	〇	伊	登	六	七	し
同	四九	光	同	三九	〇	松	樂	六	七	都
同	四八	久	同	三八	〇	二	波	六	七	美
同	四七	司	同	三七	〇	伊	登	六	七	都
同	四六	久	同	三六	〇	松	樂	六	七	都
同	四五	光	同	三五	〇	二	波	六	七	美
同	四四	久	同	三四	〇	伊	登	六	七	都
同	四三	司	同	三三	〇	松	樂	六	七	都
同	四二	久	同	三二	〇	二	波	六	七	美
同	四一	光	同	三一	〇	伊	登	六	七	都
同	四〇	久	同	三〇	〇	松	樂	六	七	都
同	三九	司	同	二九	〇	二	波	六	七	美
同	三八	久	同	二八	〇	伊	登	六	七	都
同	三七	光	同	二七	〇	松	樂	六	七	都
同	三六	久	同	二六	〇	二	波	六	七	美
同	三五	司	同	二五	〇	伊	登	六	七	都
同	三四	久	同	二四	〇	松	樂	六	七	都
同	三三	光	同	二三	〇	二	波	六	七	美
同	三二	久	同	二二	〇	伊	登	六	七	都
同	三一	司	同	二一	〇	松	樂	六	七	都
同	三〇	久	同	二〇	〇	二	波	六	七	美
同	二九	光	同	一九	〇	伊	登	六	七	都
同	二八	久	同	一八	〇	松	樂	六	七	都
同	二七	司	同	一七	〇	二	波	六	七	美
同	二六	久	同	一六	〇	伊	登	六	七	都
同	二五	光	同	一五	〇	松	樂	六	七	都
同	二四	久	同	一四	〇	二	波	六	七	美
同	二三	司	同	一三	〇	伊	登	六	七	都
同	二二	久	同	一二	〇	松	樂	六	七	都
同	二一	光	同	一一	〇	二	波	六	七	美
同	二〇	久	同	一〇	〇	伊	登	六	七	都
同	一九	司	同	〇九	〇	松	樂	六	七	都
同	一八	久	同	〇八	〇	二	波	六	七	美
同	一七	光	同	〇七	〇	伊	登	六	七	都
同	一六	久	同	〇六	〇	松	樂	六	七	都
同	一五	司	同	〇五	〇	二	波	六	七	美
同	一四	久	同	〇四	〇	伊	登	六	七	都
同	一三	光	同	〇三	〇	松	樂	六	七	都
同	一二	久	同	〇二	〇	二	波	六	七	美
同	一一	司	同	〇一	〇	伊	登	六	七	都
同	一〇	久	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇九	光	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇八	久	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇七	司	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇六	久	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇五	光	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇四	久	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇三	司	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美
同	〇二	久	同	〇〇	〇	伊	登	六	七	都
同	〇一	光	同	〇〇	〇	松	樂	六	七	都
同	〇〇	久	同	〇〇	〇	二	波	六	七	美

昭和十七年自十月廿日至廿三日四日間、於日本橋俱樂部

入賞(一等(東好) 二等(扇柳) 三等(文樂) 四等(翠瓢) 五等(しげる) 星野桔梗氏試作)

# 「イザ」知らず問題

——(頑迷なる中毒者へ)——

岡田蝶花形

二十四季四段目十種香の段に於て、勤める身はイザ知らずは、正しくイザ知らずは誤りであると、私が説いた(否先人學者及攝津大掾、五代日豊澤廣助などの名人も説いた)にも係らず、依然としてイザ知らずといふ人の多いのには驚いた。丸本(院本)も五行本もイザであるのは、已に多くの人が證明してゐる。これに就いては誰も一言もなくイザと云ふ人も、これには種々理窟はいふが、文法上「いざ」と語ると不可とするが、然し(橋本三司)とか、原則からいへば「いざ」が本當としても(石井規外)とか但しつきである。即イザを本當と認めて居る。然しイザと云ふのを直す事が出来ないといふ頑迷振りには驚いた、これには種々な理由があると思ふ。

- (一) 一旦、いつの時代かに分らずやの師匠出でイザと教へこんだ爲、丁度アルコール、ニコチン等の中毒と同じくこれを直さう、止めやうと思つても止める勇氣が出ない。
- (二) 文學者の中には「イザ」を慣用故現今の世の中では「イザ」といはれば通じないといふ一派(例へば中川愛米氏等の一派)で同じ仲間のいふ事を聞いて直すのは、いかにも自分の沽券に係るといふ様な有様。
- (三) 種々の理窟をつけて「いざ」をよいと云ふ人に共鳴してゐる一派。
- (四) イザとイザとは言葉の種類が違ひ(イザは感動詞イザは副詞)濁音一つで心臓と腎臓と違ふと同じなる事を無視

して、柳の聲を、「ばかり」と書いて「ばかり」といひ、凱陳(がいじん)と書いてあるを「かいじん」といふと同一に思つてゐる頭胸の悪さ(そんな人が師匠として、のさばる間は義太夫は進歩しないが)。

そこで石井規外説の如く義太夫道の長き口傳から慣らされてゐるものを(これは女義などに同情してゐる話だが)今更イザと訂正せよとは無理、但しイザとイザとでは意味が反對なら各別なり、と云ふて来た如く「イサ」と「イザ」とは其の意味が反對だからいけない、物が異ふからいけないと度々言ふのを、耳が遠いのか聴こえないのか、今更など云ふても物は改める時改めずは、いつの世にか誤りを直すのであらう。同情にも程があり、淨曲研究社がこれ一つ世間から改めさせ得ずして他の問題に移ることは斷じて良心が許さぬ。竹本綾之助何故にイザを改めずして日本橋俱樂部にて語れるやとある人は憤慨してゐた。

「どつちでもよい」と云ふ人と、知つてゐるが自分は今の世の中の慣用に従ふといふ人、同じく頑迷の部に入るべき人で、父上

よりパパ上の方が慣用の世の中になつたらパパ上と改める人であらうし「どつちでもよい」といふなら研究家は不必要とならう。終りにこの問題は現在の文樂其の他昔の團平等どう云つたかに就いて、淨曲研究社へ寄せたる返答を掲げて、この問題を終らう。然し正々堂々「イサ」論を掲げてせまるのでなく、如何に斯かる事を聴いても知らぬ振りて相變らず「イザ知らず」とやる人には適はない。

むくをむくとなまる人もあるから自分もなまるではわざと言葉を惡化させるのみである。

○ 豊竹古靱太夫  
十種香 勤めする身はいさ知らずと語り居ります「いざ」は不可と存じます。

○ 豊澤 團友  
十種香 文句は「いさ知らず」です、他の人のは知りませんが、私は「いざ」です。名人團平が明治三十一年一月二日初日、博勞町稻荷座で三代目大隅太天の絃で勤められた時も「いさ知らず」です。丸本も五行本も「いさ知らず」です。

## 謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

豊竹古靱太夫

竹本大隅太夫

竹本住太夫

## 謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

豊竹呂太夫

竹本織太夫

竹本南部太夫

○ 鶴澤 清八  
 動めする身はいさ知らすと小生は聞いて居ります。

○ 鶴澤 友治郎  
 野生は攝津大掾、五代目廣助兩師の教へまゝ「いさ知らす」と教授して居ります。

藝 評 一 二 題

内 田 三 千 三

土佐廣〇「〇時雨」

故土佐太夫が至藝とした新左衛門作曲の「櫻時雨」を女弟土佐廣が素玄會で語つた。原作は、明治三十八年十二月、京都兩座で先代仁左衛門と芝雀(後の雀右衛門)が初演した、高安月郊氏の戯曲である。最近の土佐廣は一見柄に無さうな「岡崎」や「岸姫」の如き時代物に精力を集中して、藝域擴大深化に情熱を注いでゐる。「櫻時雨」は久々で土佐廣が自分の國へ歸つて来たやうな個性的な良さと愉しさを豊流させた。

殊に、おとくが潤美な貞純さを巧緻に描き出す。心なく訪づれた傀儡師に「吉野様ではござりませぬか」と問ひかけられて、「佐様でござります」と云ふ短い語韻の裸に、吉野太夫の過去をほのくと滲じませる氣韻と浸艶な色香が復郁と漂ふ。三郎兵衛二人切りになつてしみんと述べ懐する雅味のある眞情味、ネバつかずサラ〜と語り棄てる風韻、淡い演出の中に滾々と流れる「深い情趣」が洵に優れてゐる。三郎兵衛は「利休の茶椀」を割つた心境を妙深に語る、それが後段の波瀾への重要な伏線的役割を克く果す。それと詞がリア

ルな「鋭い寫實」に流れず、品があつて風流の道から心悟した良質の若者をふくやかに雅描する。

紹由は切々と迫る寂韻と蒼々たる錆びこそないが、酒脱な織妙さは相當出せた。それが「茶の味はそこにある」に深い人生味が浸透せず「京の町をうる〜」の愁晴を淡巧に良描させる。

應山の家來原吾は作曲も平凡だが、紋切型で土佐廣の短所が處々露出した。安敵染みた藝風がカラツとした面白さを生み出す筋運びに終らせる。

段切れも「此の世はほんに時雨でござりまするなあ」と云ふ簡單な詩韻のある原文と違つて、この曲、作詞は月並な世話物の色彩が濃い。

全體に作曲が原作と比較すると、後半が稍クドイ。従つて土佐廣の演出も「音羽山」のマクラから、三郎兵衛が櫻町の佗住居を出て行く邊りまでが繊細な光澤と潤ひがあつて印象深い。佗びしい情趣の底に幽艶な哀れさが自つと漂ふのが、この作らしい詩情を感じさせ、主要人物の片々たる雙語にも細かい愛情の脈動があつて餘韻を生む。

人生の時雨ひとときの裸ちに、喜怒哀樂を通過して、清い愛い光りに、おとく三郎兵衛と老紹由が魅つて行く。

吉野故に沈み、吉野故に浮かぶ、運命圖を、土佐廣はユガかれた技巧で詩描した。綱助の枝は、ふくらみはないが織鋭な美しさがあつた。

最後に作者高安氏が此の戯曲の巻末で述べてゐる。「舞臺技巧上からは一見紹由がシテの如き形式を取つてゐますが、作意は利休の名器を碎いて眞實の世界に生きる三郎兵衛の魂に眼目を置いてゐます」と云ふ言葉は一人「原作の脚本」のみに限定されず、淨曲化された此の一段にも「演出上の深點」としたい。

猿春の「毛谷村」

一年一作、精進主義の猿春が「秋の小會」に彦山の六助住家を試演した。藝風も性格も、六助女房お開を想はせる此の人に「毛谷村」とは微笑まじき演目である。

水野好美の舞臺寫眞が、高座下左端に明治色を濃映してゐる。初冬の東橋亭の夜は

皇 軍 の 赫 た た る 武 勳 に 感 謝		
竹本伊達太夫	竹本七五三太夫	竹本雛太夫

皇 軍 の 赫 た た る 武 勳 に 感 謝		
竹本長尾太夫	豊竹司太夫	竹本濱太夫

筆者に壯士芝居華かなりし頃をそぞろに偲はすと同時に、その意氣に於て宛然新演劇を樹立せんとした川上、高田を回想させる猿春の熱魂を鮮感させた。

猿春の演出は味と巧さ、と云ふ點では馥郁たる香りが迫らぬが、全段を貫く氣魄は聴者の胸を揺る眞摯さがある。

お園の二十を越えた羞恥感を苦心して語る、「品」と「艶」のあるのは好ましいが、それを演出意識に入れ過ぎて表現する爲の前半は灰かに凜烈な氣組に缺け、鬱然たる古味に乏しい。「エ、と果れて取落す」も餘韻のあるユーモアがモウ一息。「確かと其の詞に違ひはないか」の「か」は巧い。激しい詰詞の語調に終始せず、六助の眞實に心動いてほぐれて行く心情の推移を鮮現する。「女房さんがござりますかへ」は少しく生地が露呈するが、初心な羞恥感を、ほつてり感賞的に描き出す「ほんに浮世と云ひ乍ら」のクドキは清冽で、じゅくりと胸打つ潤ひが濃出しなない、ガツクリ折れた女心のやさしさに還元する深美な憂愁があり度い。「つらい、悲しい、恥かしい」は寫實的だが心が籠つていい味だ。

「雨、露、雪の深山路や」では寥落たる暗愁を深描する、六助は逞くましい骨格でガツンリ表現した。

しかしお園同様前半に少しく難がある。「必ず叱つて下さるな」が稍棒で餘情のある陰影が滲じまぬ。「よつぱと味を」も腹は強いが、滋味のある含蓄が流露しない、鋭烈にお園が突掛つて来るのを、じゅつくり受けて「宗門の姿で喧嘩口論」の説理はマクれず描線が正快で佳い。あれで「今時流行る雑な」や「何んとてごんす梵論字」に風趣のある滋味が出ればグツト冴える。

お園への物語りになると「切るやら突くやらなぶり殺し」に一抹の悽愴感を漲らす。「拜んだ斗り」がつくり往生」は深寂たる佛韻が求めたい。「持て餘したるむつと顔」は手堅く運ぶ、ズングリト古風な面白さはないが、大切に語るが正しい。

「庭の青石三尺許り」は凜烈たる雄魂と豪放な重量感があり上つて最も鮮かだ。總體に六助は柄に嵌つて破綻を生まぬ、しやがれ氣味の音調と急所へタ、ミ込んで行く熱が訥子と吉右衛門を駭感させる。それと此の人の持味の眞實性が大いに役立

なる。

つ。

前半の荒削りで、大様な藝に滋味が含まれて来れば佳作になる。斧右衛門は輕妙なメインスが生き〜と浮彫にならず、生眞面目過ぎるが、變んに當て込まず、しつとりと誠實さが漂ふのが悪くない。「柵からコロリその身もコロリ」で二つのコロリを語り分けるのも、良き暗示性を持つ深味のある藝韻だ。

筆者は「彦六」の此處を聴く度にいつも「忠六」の三人百姓が、與市兵衛の死骸を勘平の家へ搬びこむ箇處を憶ひ出す。忠六の場合にはそれが「悲劇の重點」になるが「彦六」の場合には敵討解決の明るい端緒に

云ひ忘れたが「梅が暮ふ鶯の」に詩情のある雅趣が浮べぬのと、彌三松の石積みを省くのが、情、武、両面の六助の武士氣質を直截に滲透させぬ恨を招く。巧拙、適、不適、はあつても、猿春の試演物には一種強靱な迫力と氣魄があつて、鋭烈な眞實性を貫流させる。

只缺點は、餘りに心理把握に直進する爲時に渾然たる藝韻と、芳醇な滋味に缺ける女義稀に見る力闘家猿春が、個性的な眞實性の深烈さに津々たる趣味を盛つて、豊かな藝術性を創造する目を刮目して俟つ。

豊澤芳太郎構成作曲  
義太夫三味線主奏舞踊

『みのりの秋』について

鶴澤 蟻 鳳

過日日本橋俱樂部で開かれた或る舞踊會

で豊澤芳太郎氏構成作曲の義太夫三味線主

皇軍の赫赫たる武勳に感謝			
豊澤 仙糸	豊澤 廣助	鶴澤 清六	

皇軍の赫赫たる武勳に感謝			
鶴澤 寛治郎	野澤 喜左衛門	野澤 吉五郎	

奏舞踊『みのりの秋』が発表された。義太夫三味線主奏による舞踊は、私が覚えてゐるので二回目である。第一回は昭和四五年頃に鶴澤絃平氏が帝國劇場で発表した。太絃主奏樂『山と海』である。踊は當時の歌舞伎名題俳優の中堅十數名を揃へた豪華なもので、構成は、山の黎明から旭日、長閑かな風景、やがて風が出て大荒になる。海は、荒から始まり次第に治まり月明となり終る、前後四十分の大物で、作意も西洋音樂を基礎とした尖端的な構想は、當時の舞踊界、邦樂界に大きな波紋を投入した大作であつた。

今回の芳太郎氏構成作曲の三味線主奏樂は、前回の絃平氏の構想とは全然曲想が異なり、何處までも三味線音樂の深を織込んだ作曲である、景事道行物に造詣の深い氏としては當然な事であらふ。それに先づ企劃が良い、『黎明』旭日、ラジオ體操、種蒔、收穫、そして豊年をたゞへるまでである。大東亞の盟主としての大きな生命を持つ日本ゆりかぜに出来ない農村の生活を採用して、舞踊の起伏の面白い展開の中に、世に知れない義太夫三味線の良さを理解さ

やうとする文化性を持たせた事である。次はこうした意圖を以て構成作曲した氏の才能と、壯年にして今好調の極に到りつゝある扇之助君、美之助君の演技の良さがヒツタリ溶け合つて、みづ／＼しい感覺を漲らした事である。

では愚評を述べやう。開幕ベルとともに暗轉となり、賑やかな曲があつて、次第に明轉して旭日となる。清元、新内の三味線が數番續いた後に、暗い中に突如賑やかな、そして勢ひよい曲を聞かせて、觀者の驚歎と興味を把握し得た事は効果的であつた事は充分であるが、『黎明』と云ふ氣分に相應しくない。これは静かな曲に始まり『旭日』となつて勢ひのよい曲に變りたい處である。『ラジヲ體操』は新機軸が表現され踊と調和も面白い。『種蒔』に三番叟の曲を取入れたのは趣向である。こゝ云ふ曲になると踊よいと見へて、この曲間の踊が一番面白く見られた。『收穫』『そして豊年をたゞへるまで』であるが、この間の變化に今一工夫ほしかつた。終りの豊年踊りの曲は良い。扇之助君、

美之助君の演奏も鮮やかであつた。二丁の三味線で、終始觀者の緊張を獲取し得た事は大手柄である。それは又、芳太郎氏がよく短篇の作曲と云ふ點で一通の事ですと云ふ投げやりな事をせず、眞摯な熱情を傾けての成果であると云ふ事が出来る。これに深謝を呈するとともに、今後にも機會ある毎に、こゝした作曲を次々に出して、斯界の爲に奮進されん事を乞ふものである。

**當座帖**

▼大日本淨曲協會 淺草區柳橋一丁目十五番地へ移轉。(電話淺草一八九一)

番)

▼齋藤金太郎氏 淺草區柳橋一丁目十五番地に新築。(電話淺草一八九一)

なほ別宅は相洲湯河原町南湯原。(電話湯河原一六一番)

◇鶴澤觀西翁 舊關新橋演舞場の文案座打上げ後熱海に靜養中。

**御挨拶**

初日のどかに大御稜威のもと、古今未曾有の大勝の旦たを迎へ、皇軍將士の御武運長久を祈り御尊家御一同様の御壽福を慶賀申上奉ります。扱て舊年は一方ならぬ御引立を蒙りお蔭を以ちまして改名披露興行大阪(十一月)、東京(十一月)、兩座の大任も恙なく勤め終へました事は偏に御力強き御ひびきの御賜と深く感謝致して居ります。此御厚恩に報ひ向後は益々技藝向上只一筋に精進仕りますれば、何卒幾久しく御指導御鞭撻のほどを偏に御願ひ申上ます。

- 二代目 野澤喜左衛門
  - 二代目 野澤勝太郎
  - 四代目 野澤 錦糸
- 各位御中**

**皇軍の赫赫たる武勳に感謝**

鶴澤 重造	鶴澤 清二郎	野澤 吉三郎
-------	--------	--------

**皇軍の赫赫たる武勳に感謝**

竹澤 團六	桐竹 紋十郎	桐竹 門造	乙女 文樂
-------	--------	-------	-------

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。  
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。  
◎種類の催はしの外、前書を略します。  
◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)  
◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希望の會は其旨御一報を乞ふ。

本 棹 社

(メ切一月十五日迄受信のもの)

### 靜淨會忘年会

十二月四日正午より並木俱樂部に開催。

日吉(翠飄)酒屋(喜香)陣屋(司光)鳴門(東)八百屋(生昇)太十(ひつじ)志渡寺(喜城)又助(壽昇)野崎(好玉)松王(おそめ)先代(治光)中將姫(淺路)毛谷村(蝶花)合邦(綾登)陣屋(喜玉)辨慶(勝駒)戀十(蟻若)新口(痴樂)殿中(靜史)酒屋(壽飄)合邦(竹史)儀作(靜翠)忠九(桔梗)絃(都太夫)猿之助(猿平)喜知、勝助、和孝、綾之助、綱助、鶴玉、越駒、綾秀、清司、猿昇、松榮、以上順不同)なほ今回より役員左の通り。

會長(山田壽飄)幹事長(時田靜史)幹事(影山淺路、河守痴榮、八木勝駒、増田喜城、淺井蝶花、吉良蟻若)顧問(星野

口)かなめ、都太夫)河庄(越巴、和歌吉)毛谷村(蝶花、勝助)戀十(東好、和歌吉)佐太村(義昇、廣助)中將姫(淺路、綾之助)大曼寺(春和、絃平)引窓(桔梗、綱助)大切 忠七(掛合)由良之助、桔梗、九太夫、伴内、源縁、呂聲、重太郎、東好。喜多八、新昇、彌五郎、越巴。お輕、關路。力彌、奇聲。平右衛門、春和。和歌吉)

### 的野關路氏慰安會

十二月十日夕より東京會館に於て的野關路氏の慰安として義太夫の夕が催はされ、氏先輩及び後援者の主催にて聴衆は各大學の文藝部學生を始め外名士多數にて盛會を極めた。樓門(みどり、越千代)先代(團司、猿之助)忠七(由良之助、桔梗、力彌、子太郎、九太夫、呂聲、伴内、源縁、重太郎、紅司、彌五郎、呂聲、喜太八、雅樂、お輕、關路。平右衛門春和。

### 親義會の誕生

飛石かなめ、桑島團照、伊藤渥美、田中都十、高橋都雀の五氏に依り親義會が組織され、開催日を毎月廿日と定め、その第一回を十二月廿四日文化俱樂部に開催。

桔梗、徳永靜翠、岸竹史)藝術顧問(竹本大隅太夫、竹澤伸造)

### 健樂會第一回演奏

日本貿易振興會、大東亞起業調査組合主催の下に健樂會を組織し、十二月七日午後一時より交詢社ビル四階講堂に於て第一回演奏會を左記番組に依り開催。委員長春衛氏の開會の辭があつて、謡曲、民謡、舞踊、長唄、其他會員諸氏の出演に次いで近江清華氏の乃木將軍、岸竹史の寺子屋の外、小唄勝太郎、袖珍舞踊の芳野さくら子などの特別出演ありて盛會を極めた。

### 高橋東好氏祝賀會

昨秋第卅七回五十義會に於て一等に入賞榮冠を獲得した高橋東好氏は、師匠並びに先輩各位の指導鞭撻に依る處としていたく感激し、感謝の微意を表する爲め友人知己の後援の下に、十二月九日午後二時より並木俱樂部に於て左記番組に依り祝賀會を開催。

先代(豊、和歌吉)酒屋(語好、和歌吉)二度目(芝鶴、素八)日吉(初江、和歌吉)忠六(加保留、和歌吉)竹雀(淺香、勝八)八陣(新昇、和歌吉)陣屋(錦松、岡三)忠四(奇聲、和歌吉)新

寺子屋(團照、玉勝)鳴門(都十、都太夫)辨慶(渥美、柚太夫)新口(かなめ、都太夫)柳(都雀、巴丈)―抽籤順―

### 結婚 傍島紀鳳氏の「出雲會」

本誌名譽會員川口市傍島紀鳳氏は、同市株式會社大泉工場に勤務の餘暇、十二年間に五十組の結婚媒介を念願し、早くも十年間に六十八組の媒介をして日本一の仲人、生きた出雲の神としてその徳を讃えられてゐるが、氏は國策に順應してまだ〳〵百組を纏めると大に努力、今回「結婚報國出雲會」を創立して更に全國的に仲人の大同團結を圖り、近く結成される結婚報國會とも連絡をとり、どし〳〵適正結婚獎勵に拍車をかける事になつた。詳細は川口市本町一ノ七「結婚報國出雲會」へ。

### 女義後援會

一月廿八日午後三時より並木俱樂部に開催。  
夕顔棚(駒榮、佳世子)合邦(彌周、三生)先代(光助、清二)鳴門(越駒、津賀昇)玉三(佳仙、清二)沼津(昇登、綱助)太十(住若、清一)柳(綾作、金衛)市若(綾之助、清一)吉田屋(重之助、勝八)陣屋(猿春、三生)山名屋(小津賀、紋教)

# 大阪文樂座初春興行

大阪文樂座人形淨瑠璃の初春興行は元旦初日晝夜二部制として開演。本號編輯締切迄には二月興行の番組間に合はず、吉例に依り初春興行の番組を左に掲載。

## 晝之部

假名手本忠臣藏 殿中(師直、長尾太夫。判官、三瀧太夫。若狹之助、珍才、本藏、千駒太夫。司太夫。清八)裏門(隅若太夫、錦糸。呂賀太夫、友花)花籠(住太夫、吉三郎。呂太夫仙糸)判官切腹(住太夫、吉三郎。呂太夫、仙糸)霞ヶ關(松島太夫、仙松、清廣)二つ玉(七五三太夫、綱造。胡弓、勝太郎錦糸)身賣(文太夫、友衛門、八造)勘平切腹(重太夫、廣助)一力茶屋(由良之助、住太夫、呂太夫。重太郎、富太夫。喜太八、三瀧太夫。彌五郎、文字太夫。仲居、呂賀太夫。お輕南部太夫、伊達太夫。仲居、松島太夫。亭主、隅若太夫。伴内、司太夫。九太夫、千駒太夫。平右衛門、濱太夫。新左衛門)

## 安東素義文樂會

一文字屋(政龜)與市兵衛(兵次)彌八(藤一)角兵衛(常次)六(龜夫)亭主(玉米)平右衛門(光之助)

### 夜之部

小鍛冶(老翁實は稻荷明神、相生太夫。宗近、源太夫)勅使(文字太夫、津磨太夫。宮太夫。道八。寛治郎、吉五郎。友造、友平、仙三郎。叶太郎、團伊三。喜左衛門、重造)曲輪文章 吉田屋(夕霧、南部太夫、伊達太夫。伊左衛門、織太夫。おきさ、宮太夫。太鼓持、津磨太夫。喜左衛門、伊勢太夫。喜左衛門、重造。猿二郎、廣二。廣若、綱十郎)菅原傳授手習鑑 寺子屋(中、雛太夫、勝太郎)切、古靱太夫、清六)傾城反魂香 吃又平(大隅太夫、清二郎。新太郎。一郎衛門德若)

人形… 稻荷明神、松王(榮三)夕霧(文五郎)宗近、又平(玉造)勅使(政龜)伊左衛門(光之助)喜左衛門(門造)おきさ、御臺所(紋太郎)禿、萱秀才(小紋)太鼓持(藤一)仲居(常次)小太郎(紋之助)よだれくり(萬次郎)源藏、おとく(龜松)玄蕃(玉市)將監(小兵吉)奥方(多三郎)修理之助(紋司)雅樂之助(榮三郎)

安東市に於ける安東素義文樂會は、協和會安東市本部、安東新聞社、滿鐵安東厚生會後援の下に十二月十三日午後六時より安東協和會館樓上に於て建國十周年慶祝藝能祭義太夫義士會の夕を開催

開會の辭、國民儀禮。殿中 師直、暉鳳。若狹之助、美昇。判官、新笑(四段目)美昇(五段目)新笑(六段目)暉鳳(七段目)由良之助、伴内、暉鳳。三人待、力彌、お輕、新笑。九太夫、平右衛門、美昇(本下)若狹之助、ひさし。伴左衛門、南司。三千歳姫、豊州。本藏、一聲(絃、雜助)

## 神力鐵風氏追善會

細川清氏會長に就任以來、東都五十義會の爲め諸名士間を奔走し、會の發展に盡力その勞を惜しまなかつた神力鐵風氏逝いて滿一年、會長細川氏は一月十六日正午より日本橋俱樂部に於て盛大なる追善義太夫會を催ほして故人の幽福を祈つた。

讀經 燻香に次いで會長の挨拶、初手向鮪屋(三芳、猿三郎)追手向大曼寺(桔梗、綱助)以下出演番組左の如し。  
戀十(東好、和歌吉)日吉(翠瓢、綾秀)太十(正鳳、道之助)宿屋(市菊、猿藏)安達(都昇、都太夫、油屋(露瓢、綾秀)本下(鳴門、猿之助)山名屋(越巴、和歌吉)草履打(喜鳳、道之助)

## 初代一周忌追善會

初代竹本綾之助逝いて一年、靈の冥福を祈り一月三十日午後一時より二代目綾之助主催の下に日本橋俱樂部にて左記番組に依り追福義太夫會を開催。

十種香(綾之助、綾清、綾作。清一)辨慶(私樂、綾之助)玉三(治光、綾秀)壺坂(花王、綾柳)狐火(愛水、綾之助)毛谷村(里松、良造)寺子屋(吾鈴、絃平)山名屋(芦鶴、仙十郎)鮪屋(佳津子、綾之助)八陣(柳若、綾柳)岸姫(淺路、綾之助)幽學(蝶花形、勝八)堀川(光玉、綾之助)陣屋(司光、綾秀)太十(喜照、綾之助)山名屋(依、綾女)先代(以與子、良造)本下(里芳、勝助)紙治(六花、清一)組打(團鳳、仙十郎)忠四(壽瓢、綾秀)引窓(乃菊、綾之助)合邦(美松、昇登)阿漕(柳光、綾之助)長局(山生、廣助)義太夫舞踊立方…佳照、佳仙、いの子、のし三、佳世子。地方…綾千代、綾春、綾照、綾技、猿玉、綾秀、綾柳)

▼一月十五日に締切て印刷にまはした處、印刷所を立て込みで延引しうるので、其後廿七日迄の到着の通信を出来るだけ以下に記載しました。會報消息も同上。

### 日本精神作興の會

古典藝術中で日本人の犠牲的精神と道義的觀念を強く盛つたものは淨瑠璃で、淨瑠璃精神こそ日本魂である、今や前線は古今未會有の赫々たる戦果を収め、銃後の護りは國民總力を擧げて固うし、米英膺懲に邁進するの時に當り層一層日本魂の昂揚に努めねばならぬ。といふ趣旨の下に淨曲協會新理事長齋藤金太郎氏は日本精神作興の會を組織し、氏が昨年よりの肝入りで人形及義舞(身振)を創立し、これが養成に盡碎しつゝある處の人形部義舞部を使用したる淨瑠璃會を左記番組に依り一月廿日より五日間、毎日正午より上野松阪屋ホールに於て公開した。

(初日)車引。松王屋敷 綾之助、清一(寺子屋(山生、猿平))  
(二日目)草履打。長局(山生、猿藏)敵討(綾作、金衛)(三日目) 饅頭娘(彌周、三生)沼津(山生、猿藏)岡崎(土佐廣、猿平)(四日目) 椎ノ木、鮎屋(前、叶、奥、桔梗、龜造)道行(佳世子、綾作、駒榮、仙喜美、清一、清二、清三、仙照)

(美谷古)秋津島(彌聲)以上(扇之助) 先代(紀風、綾秀) 忠六(以呂波、扇之助、胡弓、猿喜知)志波寺(喜城、猿喜知)鮎屋(歸世花、鳴門(登蝶)陣屋(池鶴)以上(扇之助) 宿屋(喜香、猿喜知)妙心寺(吳光、新造)矢口(叶、扇之助)沼津(源緑、扇之助)寺子屋(ほくろ、團市)堀川(靜翠、扇之助)湊町(あるを、絃平)橋本(操、道之助)大晏寺(春和、絃平)一揆抄(壺坂(大和)紙屋(小昇)玉三(光友)帯屋(秀蝶)以上京都(金之助、扇之助)近八(清、道之助)乃木將軍(清華、扇之助)太十(巴、猿藏)大切岩戸神樂(朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫、芳太郎、美之助、松市郎、猿喜知、絃吾、扇之助、和孝)

### 鸚鵡會 (第四回)

鸚鵡會は三月四、五兩日丸ノ内大東亞會館に於て第四回を開催する事に決定。番組は左記の通り。

(初日)岸姫(昇登改め綱昇、綱助)十種香(春華、清芳)鰻谷(土佐廣、綱助)先代(染登、猿幸)沼津(小仙)一(二日目)寺子屋(綱昇、綱助)山名屋(春華、清芳) 太十(染登、猿幸) 紙屋(土佐廣、綱助)忠九(小仙)

### 女義太夫定席の復活

女義の定席なるもの打絶えて久しく黄金時代の昔日を思は

(五日目)裏門。忠六(桔梗、綱助)七段目(由良之助、山生、おかる、關路、平右衛門、春和)

### 名作淨瑠璃同好會

久しく休會中であつた名作淨瑠璃同好會は第八回を二月十四日午後一時より並木俱樂部にて開催、菅原の二段目より四段目迄全部一枚もカットなく上演する事になつた。  
二段目(道明寺)杖折檻(中次、和孝)東天紅(蝶花、勝助)相玉名殘(平茶、吉和)三段目(車引)時平公、淀橋。梅王、ほくろ。松王、義昌。櫻丸、中次。龜造(茶釜酒(王華、和孝)喧嘩(一司、和孝)訴證(淀橋、和孝)櫻丸切腹(うづや、龜造)四段目(天拜山)子太郎。和孝(寺子屋)寺入(雅樂、和孝)源藏戻り(ほくろ、團市)首實檢(義昌、綱助)

### 行田以呂波氏祝賀會

豊澤扇之助連の行田以呂波氏は昨秋京都市平安素人淨曲會競演大會に出演し一等に入賞の外、優勝旗並びに團體旗をも獲得の榮譽を得たのでこれが祝賀義太夫會を主催し、一月廿八日正後より並木俱樂部に於て帝都素義界及び京都平安會幹部諸氏應援出演の下に賑々しく開催した。  
組打(喜久壽)寺子屋(一光)中將姫(扇華)又助(茂玉)合邦

する事切であつた處、今回義太夫因會女子部の努力に依り雷門東橋亭を定席とし女義旺盛の再來を圖るべくこれが復興大會として二月一日午後一時より左記番組に依り東橋亭にて開催した。

壽三番史(翁、綾之助。千歳、重之助。三番史、彌周。清一、ツレ清二、清三)壺坂(素廣、駒登久)逆櫓(猿春、三生)酒屋(素昇、猿玉)太十(光秀、染登、初菊、小津賀。十次郎、絃千代。さつき、住若、操、巴駒、紋教)鳴戸(綾作、金衛)寺子屋(素八、巴住)質店(土佐廣、綱助)十種香(越駒、津賀昇)野崎村(久作、駒若。お光、文昇。お染、若好。久松、素次。母、佳仙。およし、津賀重。猿幸。ツレ、巴住、清三、津賀昇、素女)

### 淨曲中老會

中老會の第卅八回は月廿九日午前十一時より淺草並木俱樂部に開催。湊町(あるを、絃平)先代(奇聲、和歌吉)忠九(昇、猿平)鳴戸(前(松王、絃平)同奥(盛鶴、絃平)下總屋(越巴、和歌吉)紙治(操、道之助)本下(美峰、猿之助)布四(掛合)鮎屋(前(義昌、綱助)同奥(吞笑、絃平) 忠六(茂里雄、猿平) 玉三(巽、絃平)彌作(いろは、團市)沼津(春和、絃平) 寺子屋(桔梗、綱助)野崎(久作、美峰。お染、操。お光、あるを。久松、およし、母、春和、道之助)

消息 會報

(二月十五日迄受信)

靜 淨 會

山田壽瓢

本會は十二月四日午前十一時より並木俱樂部にて忘年義太夫會を無事終了。恰も東上中の竹本大隅太夫氏も臨席頗る盛會を極む。同五日午後五時より柳橋二葉亭に於て懇親會を催し、十七名出席、會長の挨拶、會計報告、其他一月初演等打合せ午後八時散會す。

本會の會員は靜岡縣人及び縁故ある人々にて目下二百名に達し、これが名簿二百冊を百貨店新聞社々長徳永靜翠氏より寄贈せらる。

及び、常に練習と研究を重ねつゝある中にも當會の津満子嬢の吹込みは天性豊富の聲量に藝能勝れたる出来榮は頗る好評を博し、將に當會の人氣を呼び起せり。次回吹込みは、太十の豫定なり。當年語り初は三好宅に於て一月二日、朝顔喜三香、すしや津満子、鳴門ます子、野崎博好、三味線津満子、三好。

仲よし會忘年會

仲よし會は十二月五日正午より相互俱樂部にて忘年會を開催。毛谷村(冠之)中將姫(吳洲)宿屋(美松)先代(以與子)新口(團鳳)鳴門(昇華)酒屋(一樂)野崎(芦鶴)帶屋(重豊)山名屋(稻華)絃(良造、昇登、好造、猿三郎)

翼扇會忘年會

豐澤扇之助連翼扇會の叶氏、彌聲氏、伊呂波氏(以上夫妻)美谷古、扇華、喜久壽、一光氏は十二月十四、十五日網代鹿島館にて、十六日、伊豆山相模屋にて忘年會を催

伊豆山より

徳永靜翠

戰捷第二年目之春を迎へて、益々御清祥の段奉賀候

扱て例年の恒例に依りて、去る三日より五日に亘り、伊豆山相模屋に於て親友岸竹史氏、相模屋主人濱田三郎氏、其他の連中と共に、左記の通り三四日の兩日間、相模屋の大廣間に舞臺を作りて、公演會を開催致し候處、非常なる好評にて、文字通り洵に朗らかなる新春を満喫致し候

猶我が黨の先輩星野桔梗氏、並に大阪南の大棹藝者喜多助、常助の兩女も此一行に参加致され、一段の賑はしさを加へ申候。(一月六日)

(三日) 朝顔(梅木、三木)合邦(美谷古、三木)封印切(子太郎)紙屋(靜翠綱助)壺坂(桔梗、綱助)一四日一先代(梅木、三木)紙屋(相模、三木)岸姫

す。相模屋にては主人相模氏並びに名古屋よりの浴客某氏も飛入りにて出演盛況を極めた。

淨曲長生會

第七回を一月廿六日正午より上野松阪屋ホールに開催。吉田屋(愛水、綾之助)先代(喜鳳、道之助)引窓(乃菊、綾之助)忠九(山生、廣助)十種香(一樂、良造)朝顔(正鳳、道之助)鮎屋(佳津子、綾之助)紙治(六花清一)

豐澤和孝師

三並義昌氏と同氏の故郷愛媛縣新居濱に行き、土地の人々と同地に一夕の會を催し、翌日は中秋町にて再開。

野澤喜左衛門師

野澤勝平師は昨冬文樂座にて二代目野澤喜左衛門を襲名し、その襲名披露の收入金を割いて陸海軍へ金七百圓宛を献金した外、因協會にも寄附をした。

竹本濱太夫師

出征中なりし村上多津次事文樂座竹本濱太夫師は舊臘芽出度歸還。

(美谷古、三木)志度寺(子太郎、綱助)酒屋(喜多助、常吉)合邦(竹史、常吉)堀川(靜翠、綱助、ツレ常吉)寺子屋(桔梗、綱助)

三 好 會 森 三 好

第十五回三好會は相互俱樂部に於て十一月二十八日豫告通り午後正六時より太十(單語、燕糸)日吉(喜三香、三好)先代(花昇、燕糸)酒屋(聲鶴、三好)壺坂(梅聲、三好)辨慶(岡玉、三好)にて開演、當日は寒いにも不拘晴天にて御來客多く、久しく小笠原島に轉居の單語氏御歸京出演、且は太棹社より御來場を忝うし、花昇氏及燕糸氏の當會初出演に、座談も一入興を加へ、將來の發展の一步を迎へ、十一時半散會した。

なほ創立以來尙日淺きにも不拘、俱樂部に出演する事既に十五回の多きに

古曲發表會

義太夫古曲發表會同人は舊臘廿八日午前十時奥澤村九品佛にある故豐澤松太郎の墓に詣で、歸途神奈川縣二ノ宮に至り二ノ宮館に一泊の上、十七年度の慰勞會を催した。出席者は巴太夫、芳太郎、和孝、猿喜知朝見太夫、扇之助。なほ今春の發表會は四月二日並本俱樂部に開催し、今回は晝公演として十二時卅分開演、四時卅分終演。例に依り大切は結城孫三郎人形出遣ひにて上演。

女義若女會

會場東橋亭、第五十九回は新春初會として一月一日午後五時半より開催。忠六(津賀重、素一)揚屋(素次、清三)朝顔(光助、駒登久)壺坂(素昇、猿玉)太十(素八、巴住)吉田屋(小津賀、紋教)一第六十回(一月十五日)一辨慶(津賀重、素一)合邦(素次、清三)新口(巴駒、巴住)柳(住若、有一)蝶八(素八、巴住)野崎(越駒、津賀昇)

古曲發表會同人

古曲發表會同





謝感に勳武るた々赫の軍皇

製函・製材・土木・建築  
運送・勞力供給・演藝部 業

# 籠 寅 商 店

保 良 鈴 鳳

出 張 所

（東京、横濱、名古屋、京都、大阪、  
神戸、廣島、小野田、門司、戸畑

本部下關市

電話一七二二番、 二二九〇番、 二八四八番  
運送部（代表）長四二一番 製函部（代表）〇七一七番  
建築部（代表）一四七六番 演藝部（代表）二四六六番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 安藤どくる

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

夫 太 義

# 翼 會

中 村 白 猿

大 用 大 嘉 津

篠 倉 山 門

横 井 三 由

豊 澤 猿 藏

日本橋區蠣殻町一ノ六

電話茅場町一九二七番

(イロハ順)

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

# 巴 津 天 會

會 長 寶 藏 寺 天 昇

相 談 役

宮 島 和 紅

常 務 理 事

武 藤 壽 昇

事 務 長

長 谷 川 勇 昇

顧 問

竹 本 巴 津 昇

事 務 所

杉並區和田本町九五二

竹本巴津昇友

電話中野五七九三番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

安	高	吉	長
藤	瀬	田	谷
光		三	川
樂	操	芳	文
			久

(イロハ順)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

中  
澤  
巴

謝感に勳武るた々赫の軍皇

近  
江  
清  
華

謝感に勳武るた々赫の軍皇

及  
川  
旭

齋  
藤  
山  
生

和  
田  
金  
扇

謝感に勳武るた々赫の軍皇

德  
永  
靜  
翠

事務所 京橋區銀座六ノ四  
電話銀座(57)一九九五番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

乃  
村  
乃  
菊

高  
瀬  
瀬

伊  
藤  
松  
鶴

謝感に勳武るた々赫の軍皇

鈴木松寶

謝感に勳武るた々赫の軍皇

東都五十義會々長

細川清

本所區東兩國二丁目四  
電話本所〇八一八番





謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 督聲會

(町津府國道海東)

澁谷督廣	野澤督八	佐藤義美	野池秋聲	椎野義好	讓原督糸	村越松玉	古家督八重	柏木吾妻	石塚督菊
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 淨曲無名會

(見後)

安藤とくろ	保々長平	河野國聲	高瀬操	桑原美峰	鈴木和樂	星野桔梗
-------	------	------	-----	------	------	------

事務所

神田區花房町三  
(河野方)  
電話下谷五四〇番

# 親義會

(イロハ順)

飛石久太郎	高橋源太郎	田中増藏	桑島榮一	伊藤晨評
-------	-------	------	------	------

小石川區富坂二ノ一三  
電話小石川八九九番

中野區本町通四ノ一  
電話中野二四七七番

牛込區東五軒町五四  
電話牛込五七七四番

かなめ  
電話牛込五七七四番

四谷區東信濃町一〇  
電話四谷四一八八番

澁谷區代々木富ヶ谷町一四〇〇番  
電話澁谷三六七八番



謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 會扇翼曲淨

豊	三	三	歸	行	近	藤	黑	岡	德	原	池
澤	浦	谷	山	田	藤	代	川	田	永	喜	澤
扇	美	美	歸	い	茂	一	彌	彌	靜	久	池
之	扇	谷	世	る	は	玉	光	叶	聲	翠	鶴
助	華	古	花	は	玉	光	叶	聲	翠	壽	

(イロハ順)

本所區向島三丁目二五  
電話墨田二八八番

瀧野川區瀧野川町六六八

## 綾秀會

## 飛石かなめ

牛込區東五軒町五四  
電話牛込五七四七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

武  
笠  
吉  
樂

白  
井  
清  
華

松  
岡  
語  
松

謝感に勳武るた々赫の軍皇

宮内ほくろ

京橋區京橋二ノ八  
電話京橋八〇三三七番  
八〇六五番

東京不動産通信社

社長 岩田幸左衛門

(號) 未成

東京市芝區西久保櫻川町廿四番地  
電話芝(43)一八四〇番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

會みつか

鶴澤勝助 里喜喜蝶叶  
芳勇く花

會鵠鸚

昇登改メ

豐竹綱昇  
竹本春華  
竹本土佐廣  
竹本染登  
竹本小仙  
鶴澤綱助  
豐澤清芳  
豐澤猿幸

事務所

澁谷區金王町九  
(竹本染登方)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

女  
天  
會

事務所 本所區向島須崎町八六番地  
(黒川叶方) 電話墨田五〇六八番

曲淨  
梅  
鉢  
會

事務所 本所區向島須崎町八六番地  
(黒川叶方) 電話墨田五〇六八番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

銀  
座  
義  
榮  
會

京橋區小田原町一丁目一四(木村別館)

電話築地二三七六番  
事務員 飯田千島

香  
伯  
會

鶴  
澤  
觀  
西  
翁

義  
松  
會

豊澤松造  
豊澤松四郎

謝感に勳武るた々赫の軍皇

鈴木兒雀

保谷紅司

坂倉素遊

謝感に勳武るた々赫の軍皇

增增  
田田  
喜喜  
香城

芝區田村町五ノ八  
電話芝四〇九六番・四六〇五番

吉田登盛

錦  
錦  
松

御料理 二葉 錦さと

深川區白河町一ノ六  
電話本所二六五番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

平塚市

國

森

鳴

門

三並義昌

日本義太夫因會  
男子部一同

事務所

赤坂區田町六丁目四番地

電話赤坂三〇四七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

目黒區上目黒五ノ二三三四一

痴樂河守浩

電話三八六五番

蛭子錦

大森區田園調布一ノ一二三四  
電話田園調布三六六六番

高橋東好

京橋區築地二丁目四番地

皇軍の赫赫たる武功に感謝

京濱素義聯盟會々長

國友東光

豊島區千早町二丁目三七

素玄淨曲研究會

岡田蝶花形

毎月淨曲研究發行希望者呈  
毎月最終日曜日夜半迄相互俱樂部にて素玄淨曲研究會を開催

女歌舞伎 坂東勝治劇身振舞踊協會

座員一同

太夫元 魁家廣丸

事務所 東京府下吉祥寺二七四三 電話吉祥寺五〇番

皇軍の赫赫たる武功に感謝

星野桔梗

緒方千晴

繪解芝居追々出來ます。御利用を願ひます。

太十、壺坂、合邦 東京市日本橋區吳服橋二丁目三

揚屋、柳、寺小屋 奥村鑛業所

忠五、忠六、野崎 奥村三玉

其他

電話日本橋(24)〇九三四番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 仲よし會

豐	鶴	豐	豐	鈴木	關	齋	齋	小
竹	澤	澤	澤	木	口	藤	藤	柳
綱	好	猿	良	美	一	稻	重	團
昇	造	三	造	松	樂	華	豐	鳳
		郎						

(イロハ順)

米澤雅樂

京橋區京橋一丁目九番地

美術商

關	關
口	口
以	一
與	
子	樂

金子里松

龜田松花

濱野若狸

須田美義

謝感に勳武るた々赫の軍皇

大  
築  
葵

大  
用  
大  
嘉  
津

的  
野  
關  
路

西  
源  
綠

菊  
地  
秋  
月

野  
口  
み  
な  
と

謝感に勳武るた々赫の軍皇

中  
島  
古  
平

阿  
部  
一

本郷區根津宮永町二八  
電話下谷 六五四五番

大  
森  
さ  
い  
波  
會

三  
好  
會

東京市小石川區水道端町一丁目三二(森方)  
實習研究日 每日午後七時半より・旗日午前九時より  
森 三 好 電話築地〇八七四番  
信 ち 子 子 子 津 滿 子  
歌 三 香 巴 博 好 好 好  
喜 三 香 巴 博 好 好 好  
(數多外)

謝感に勳武るた々赫の軍皇

坂本あるを	藤本喜鳳	松岡茂里雄
青山和曉	江原清昇	横井三由

謝感に勳武るた々赫の軍皇

浅田奇聲	平井榮	寺岡三幸
平山平茶	川口子太郎	吉川浪補

謝感に勳武るた々赫の軍皇

靜 淨 會

事務所 本所區向島須崎町八九（竹本越駒方）

電話墨田七五三八番

結婚報國出雲會

會長 傍島紀鳳

川口市本町一丁目七番地

電話川口 二四〇八番  
三二〇七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

山田義昇

水戸部いづみ

高橋可遊

小川都山  
小川都川

廣瀬いろは

歸山歸世花

謝感に勳武るた々赫の軍皇

竹本素女會  
女義若女會

竹本素女

芝區西久保巴町四一番地  
電話芝(43)二五七七番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

森市菊

森内六花

柳有明

柴野筑波

席貸  
相互俱樂部

本城冠之

牛込區神樂坂(毘沙門前)  
電話牛込〇〇四三番

波多野三樂

謝感に勳武るた々赫の軍皇

謝感に勳武るた々赫の軍皇

區六園公草淺

義太夫座

橘館

電話淺草(84)三六三〇番

電話淺草(84)一五九八番

竹本駒若

自宅 淺草區田島町三九番地

竹本綾之助

鶴澤清一

竹本重之助

鶴澤勝八

謝感に勳武るた々赫の軍皇

# 綾之助會

會員一同

淺草區柳橋一丁目七番地  
電話淺草(84)七三五九番

謝感に勳武るた々赫の軍皇

中山雷綱

竹本朝見太夫

野澤語左衛門

野澤道之助

むつみ會

豊澤和孝

豊澤松榮

謝感に勳武るた々赫の軍皇

日本義太夫因會  
女子部一同

事務所

芝區巴町四一番地(竹本素女方)

電話芝(43)二五七七番

女優身振劇

竹澤龍造一座

座員一同

竹澤龜次郎

長野市岡田町

田中和國

別府市濱脇足達病院

足達延壽

電話一五八七番

② 郵船組 岩崎虎一

山彦

安東市北一條通四丁目一七 電話二三〇八番

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

古 賀 大 彌

營 業 所 八 幡 市 通 町 十 六 丁 目

電 話 八 四 八 番  
一 一 五 六 〇 番  
二 二 七 〇 七 番  
二 四 六 六 番

自 宅 八 幡 市 紙 屋 町 一 丁 目

電 話 一 一 七 四 番

谷 岡 若 葉

福 岡 縣 福 間 町 一

加 藤 兜

名 古 屋 市 中 區 南 桑 名 町 三 三

佐 藤 和 聲

濱 松 市 鍛 冶 町 一 三 五

加 藤 壽 松

靜 岡 市 南 町 一 丁 目 七

神 戶 市 須 磨 區 西 垂 水 町  
岡 田 源

大 阪 市 東 區 兩 替 町 一 丁 目 二 三

西 村 紫 紅

京 城 府 日 ノ 出 町 一 三

志 岐 紫 扇

大 垣 市 城 畔

吉 岡 十 八 公

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

謝 感 に 勳 武 る た 々 赫 の 軍 皇

日 本 因 協 會

大 阪 市 南 區 竹 屋 町 一 七

旭 勝 會

大 連 市 信 濃 町 三 七

滿 洲 國 安 東 市

金 桶 暉 鳳

船 橋 市 五 日 市

川 奈 部 銀 司

太 棹 社

富 取 壽 鹿

柏 葉 社 印 刷 所

杵 淵 五 郎

小 石 川 區 指 ヶ 谷 町 四  
電 話 小 石 川 一 五 三 番 (呼)

芳齋美味  
愈越地進

料理の味をよくする

チキンソース



東京チキンソース株式會社

昭和十六年三月廿八日  
第三種郵便物認可

昭和十八年一月廿三日 印刷納本  
昭和十八年一月廿五日 發行

(每月一回  
十五日發行)

大棹 (第四百四十一號)

(定價 五拾錢)